

# 菩 薩 遺 跡

1987

東海市教育委員会

# 菩 薩 遺 跡

1987

東海市教育委員会

## 序

菩薩遺跡は、本市北端に位置し、古代のあゆち渦に面した地であります。付近には、前期古墳の兜山古墳や、その時期の住居跡を検出したカブト山遺跡をはじめ、白鳳期の瓦を出土したト・メキ遺跡など数多くの遺跡が分布します。また、「延喜式」神名帳に記載される水上姫子神社が鎮座し、日本武尊にまつわる伝説の地であります。

この地に、広範囲にわたって遺物が散布することは、池田陸介氏によって報告されていました。このたび、名和北部土地区画整理事業が実施されることになり、昭和57年と同58年の2期にわたり、本市教育委員会が発掘調査を実施しました。その結果、本市では初出の木製品をはじめ、縄文時代から中世に至る多種多様な遺物が出土し、古代生活史の解明に大きく寄与するものと考えられます。

さて、ここにその調査概要をまとめることができました。本書のために出土の植物について御執筆くださった愛知学院大学教養部・高木典雄博士に心からお礼申し上げます。この報告が広く活用されて古代史の研究にいささかでも寄与することができれば幸いです。

なお、調査研究にあたっては、調査担当者の杉崎章氏をはじめ、愛知県教育委員会文化財課、名和北部土地区画整理組合、その他多くの機関・研究者から御指導と御援助をいただきました。また、調査の進展には、寒風の下で水につかりながら作業をしてくださった地元婦人諸氏・学生諸君の協力も忘れることはできません。

ここに、御協力くださった関係各位に対し深甚なる謝意を表します。

昭和62年3月

東海市教育委員会

教育長 森本良三

# 目 次

序	IV 遺 物 ..... 18
I はじめに ..... 1	1 土製品類 ..... 18
II 調査経過 ..... 3	2 木製品類 ..... 33
1 既往の調査 ..... 3	3 金属製品類 ..... 36
2 調査の概要 ..... 3	4 動・植物遺体 ..... 36
III 遺 構 ..... 12	付 揭載遺物観察表 ..... 39
1 坑 ..... 12	V まとめ ..... 62
2 溝 ..... 12	
3 沼状の凹地 ..... 13	付編 菩薩遺跡における出土植物 ..... 64

# 図 目 次

図1 調査地区図	図19 弥生土器・土師器実測図
図2 周辺の遺跡	図20 線刻土器拓影図
図3 調査区（南北）土層図4-1	図21 検出遺構
図4 調査区（南北）土層図4-2	図22 II 1 B 20区内灰釉陶器・木製品および石出土状態実測図
図5 調査区（南北）土層図4-3	図23 須恵器実測図I
図6 調査区（南北）土層図4-4	図24 須恵器実測図II
図7 調査区（東西）土層図3-1	図25 須恵器・円筒埴輪拓影図
図8 調査区（東西）土層図3-2	図26 灰釉陶器・線刻陶器・姿器系中世陶器 ・土鍤・製塙土器・瓦・土師質土器実 測図
図9 調査区（東西）土層図3-3	図27 遺物出土状況
図10 II 1 B 25横埋木	図28 木製品類実測図I
図11 調査区実測図2-1	図29 木製品類実測図II
図12 調査区実測図2-2	図30 出土遺物I
図13 坑および溝の時期模式図	図31 出土遺物II
図14 楯文土器・土偶実測および拓影図	図32 種子I
図15 弥生土器拓影図I	図33 種子II
図16 弥生土器拓影図II	
図17 弥生土器類拓影図III	
図18 弥生土器実測図	

# I はじめに

本遺跡は、愛知県東海市名和町苦蘗に所在する。

調査は、県教育委員会文化財課の指導のもとづき、遺跡の範囲を確定するための試掘調査を実施し、遺跡範囲内の道路予定地について1982年と1983年の2回にわたり実施した。

調査期間及び面積は、1次が10月14日・15日と11月15日～12月23日・683m<sup>2</sup>、2次が10月4日～10月21日・296m<sup>2</sup>である。2次の調査にあたっては、県の文化財保存事業費補助金の交付を受けた。

調査の地区割は、土地区画整理図に記載された、名古屋市と境を画するK21の杭を中心として、南北基準線と東西基準線を構成し、左上から左まわりにそれぞれI・II・III・IV区に分けた。次に、両基準線をそれぞれ25m単位で区切り、南北基準線から東西へ算用数字を、東西基準線から南北へアルファベットを付し、基準グリッドとした。各基準グリッドをさらに5mずつ25等分して、左上から右に並列式に1～25の番号を付し、発掘調査の基本単位とした。なお、ここで使用した南北基準線は方眼北で磁北に対しN 6°20' Eの方位にあたる。

1次と2次をあわせた発掘調査の組織及び協力者は次のとおりである。

調査主体者 東海市教育委員会

調査担当者 杉崎章

調査員 立松彰、奥川弘成

調査参加者 磯部幸男、坂野俊哉、岡部かな枝、佐藤つや子、神野トシエ、坂野玉子、山中やす子（富木島町）、井上静枝、井上芳枝、大村きよみ、北川敦郎、佐久間高子、佐治時子、寺島和子（大田町）、北川すぎ子、北川ゆり、新海久子、深川哲子（高横須賀町）、成田敦（日本福祉大学）、沢井尚之、野沢悟徳、畠井定士、浜崎元弥（名古屋大学）、片山武史、近藤直樹（社会教育課）はじめ教育委員会職員

調査協力者 愛知県教育委員会文化財課教育主事伊藤稔、同加藤安信、名和北部土地区画整理組合・組合長早川利喜、池田陸介、加古兼敬、中村信幸、中野晴久、早川幸吉、山下勝年

本書は杉崎章氏の指導のもとに奥川弘成（IV-1-a）と立松彰が分担執筆し、愛知学院大学高木典雄氏の玉稿を加えて立松が編集した。



図 I 調査地区割図(X網目区域Ⅰ次調査・●網目区域Ⅱ次調査)

## II 調査経過

### 1 既往の調査

本遺跡の調査は、1971年から池田陸介氏が行われた、本市名和町から名古屋市緑区大高町一帯の踏査によって採集された遺物の研究にはじまる。それによれば、天白川南岸の丘陵面と、近世の干拓ではじめて農地となった氾濫原との間にはさまれた、洪積世の低位段丘面に形成された名和町菩薩から大高町中之島に及ぶ水田一帯に、条痕文土器・弥生土器（中・後期）・須恵器（古墳時代前期）・灰釉陶器・瓷器系中世陶器・製塙土器などの出土することが明らかにされている。

その後、1972年と73年の2回にわたって本遺跡の西方約700mの丘陵上にあるカブト山遺跡の集落跡が発掘調査された。その調査を担当した杉崎章氏は、天白川南岸段丘一帯の遺跡についてまとめ、本遺跡について「延喜式」神名帳に記載された火上姫子神社にまつわる尾張氏の居館跡の集落に推定されるものではないかと述べられている。<sup>(注2)</sup>



図2 周辺の遺跡

### 2 調査の概要

1982年に実施した1次の調査では、遺跡の範囲確認の試掘調査からはじめた。その結果 I 2 B 15とI 4 A 16を結ぶ段より南側に、弥生時代以降の遺物包含層がひろがっていた。この区域のうち、配水管の埋設される幅6mの道路用地について発掘調査を実施した。その範囲は、直線距離にして南北、東西とも約90mである。東西にのびる道路のうち、II 4 Aと丘陵下のII 1 CからII 4 C間については遺物・遺構は認められなかった。

なお、I 2 AのT字路付近にあるフキ栽培のビニールハウスについては、フキの苗が育てられており、次年度に調査することになった。

1次調査を、試掘の結果最も密に遺物を包含するII 1 A 17・18を通る小道の南側から丘陵に向けて進めた。II 1 B にみる遺構面は、水田面下に堆積する40cmほどの黒色砂層下の灰色砂層に存在する。この面から検出した坑群には、弥生時代と古墳時代のものが認められるが、ともに同一面に設けられており、各時期を通した遺跡の基盤であることを示している。I 2 A, II 2 A 方面もII 1 B とほぼ同レベルの基盤が続き、北部の I 2 A 23・24区に至り急に段をなす。I 2 B 8 の試掘Aでは、約 1.4m も低くなり、基盤も海成粗砂層になる。西側はII 3 A 14で一段低くなり、II 4 A 方向に向ってわずかに高くなる傾向をみせる。これら北と西の一段低くなった方面には遺物包含層も続かず、遺物の出土はほとんどない。I 2 A, II 2 A 方面も遺物の出土は少ない。

II 1 B 9 で包含層に掘り込んだ溝2を検出したが、この地点から丘陵に向って基盤面が下がる。最も深いところで、現地表面下約 1.3m あり、丘陵に近くなるにしたがい序々に浅くなる。この沼地状の凹地の西端は、II 1 C 2 で終っている。

当調査区では、溝9、坑群などの遺構を検出し、遺物もII 1 Bを中心にして各種木製品や土器類などが出土した。

なお、菩薩と境を接して北西に位置する萩ヶ森にある墓地にも遺物の散布が認められることから2箇所の試掘を行ったが、遺物・遺構とも認められなかった。墓地は周囲の水田面より一段高くなってしまい、おそらく、他所から土砂を運搬して設けられたものと思われる。

1983年の2次の調査は、前年調査できなかったビニールハウス部分について実施した。調査の結果、溝6・7・8がさらに西に続き、坑群がII 2 A 8まで広がっていることが判明した。遺物は、土器類が出土したがあまり多くなかった。

こうして2次にわたる調査によって出土した遺物は、縄文時代から中世に及んでおり、その間の地形の変化も含め生活史解明に新たな基礎資料を加えることができた。

### 注

- 1 池田隆介 1973 東海市名和町の遺跡 文化財調査委員報告書 東海市教育委員会 P.1～P.9  
三渡俊一郎、池田隆介、吉村睦志 1975 名和・大高の遺跡  
三渡俊一郎、松岡浩、吉村睦志、池田隆介 1976 緑区の考古遺跡 文化財収集第69号 名古屋市教育委員会 P.10
- 2 杉崎章 1974 天白川南岸段丘の遺跡 愛知県東海市カブト山遺跡第二次調査報告付載二 東海市教育委員会 P.35～P.42

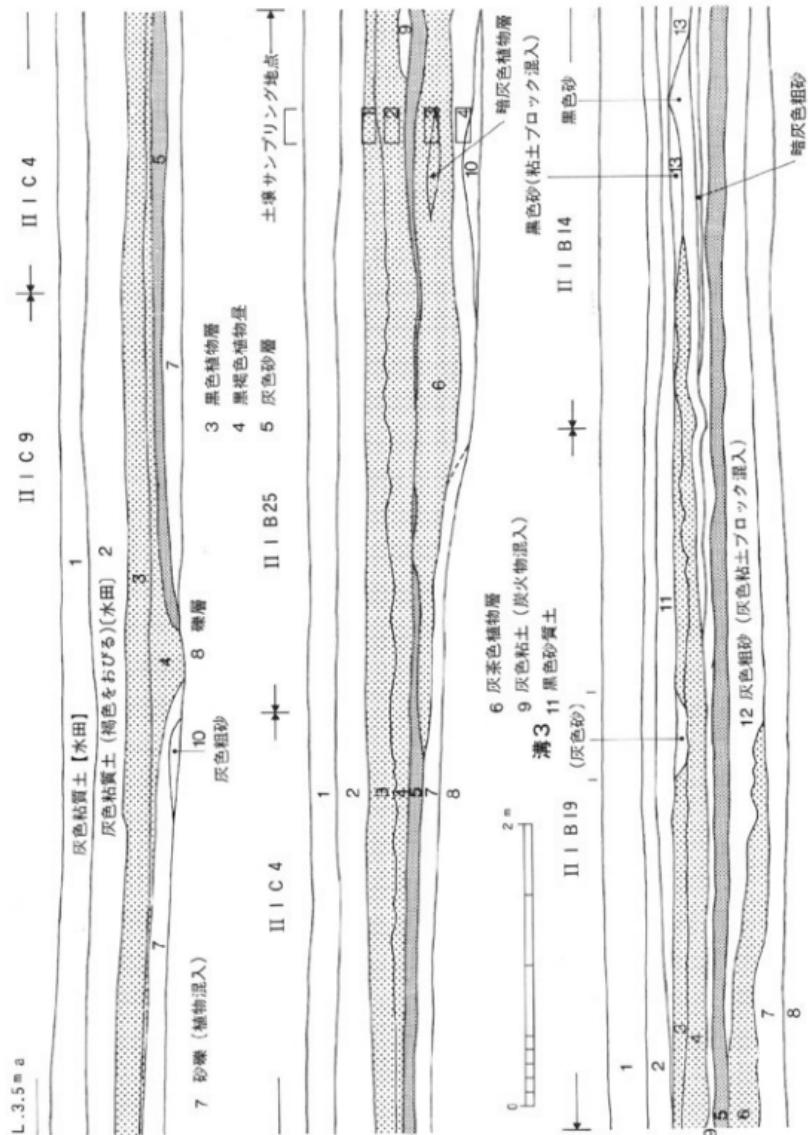


图 3 调查区(南北)土壤图 (a—a'断面一致) 4—1

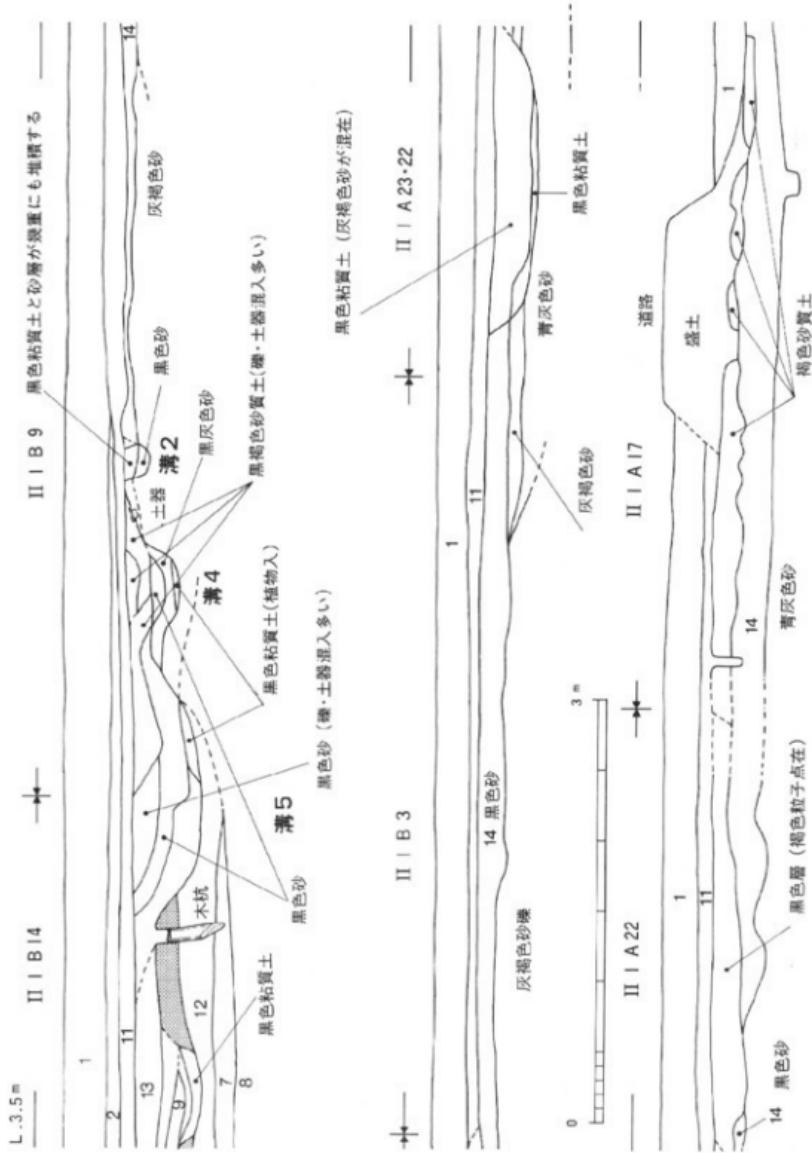


図 4 調査区（南北）土層図 4—2

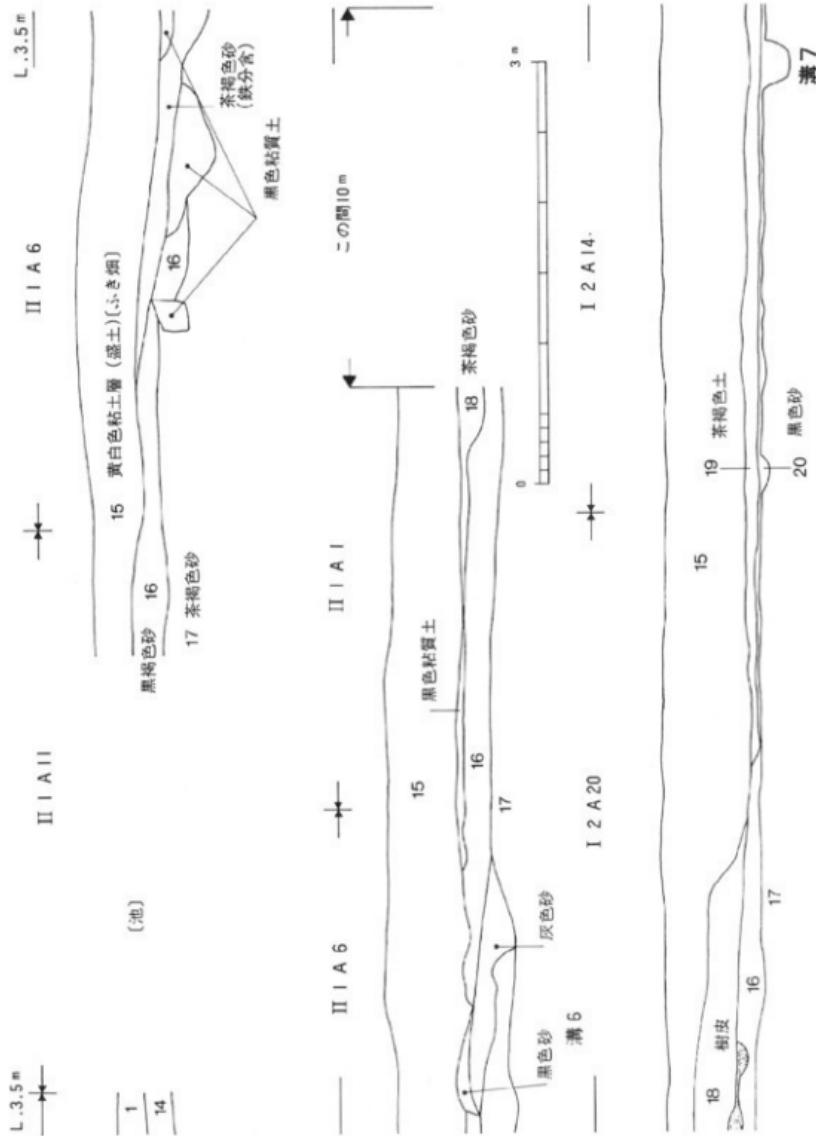


図 5 調査区（南北）土層図 4—3

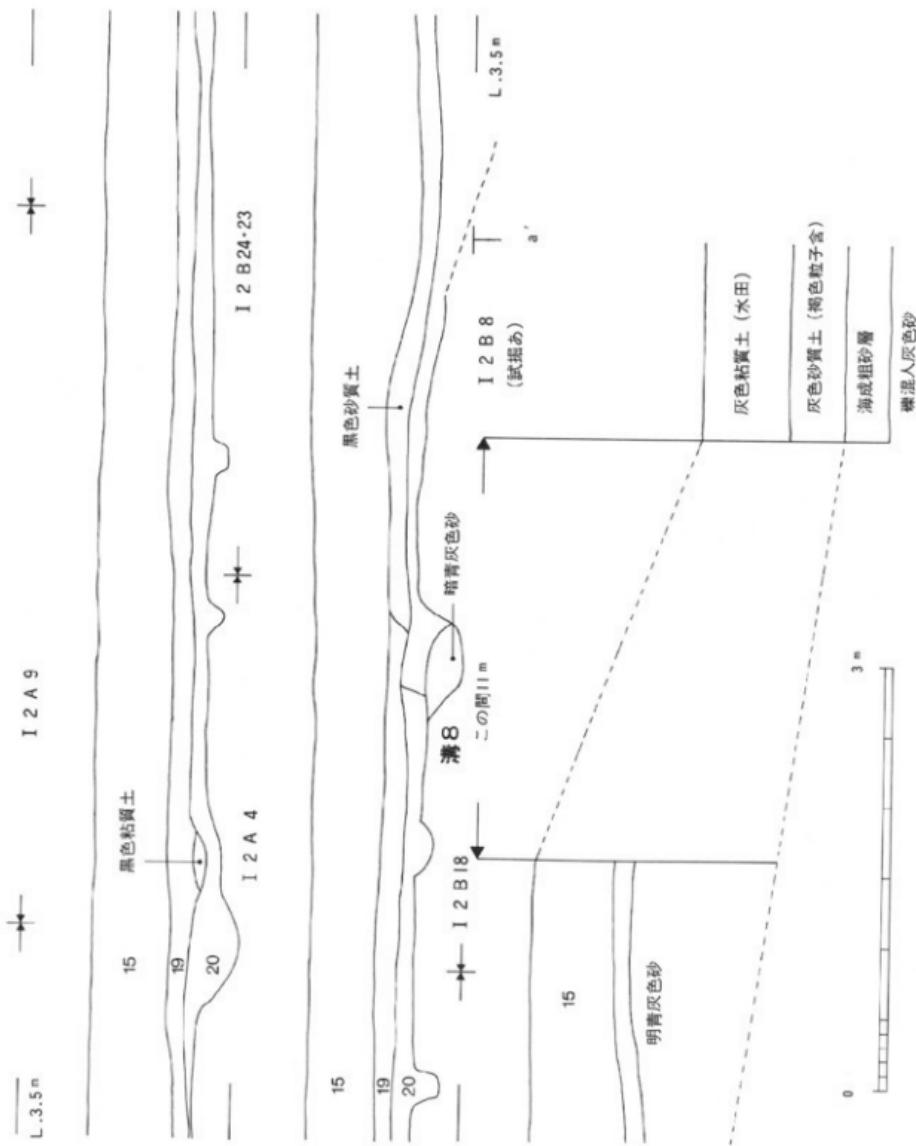


図 6 調査区（南北）土層図 4—4

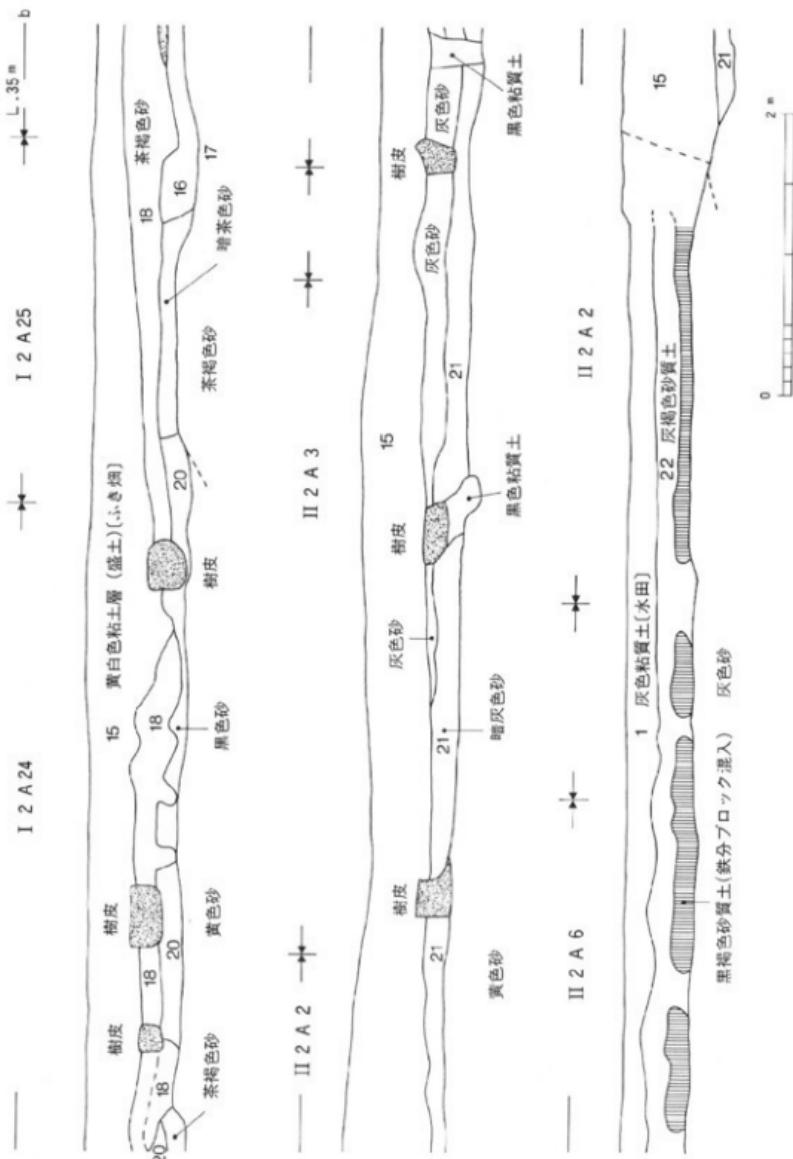


図 7 調査区（東西）土層図 (b—b'は図1と一致) 3—1

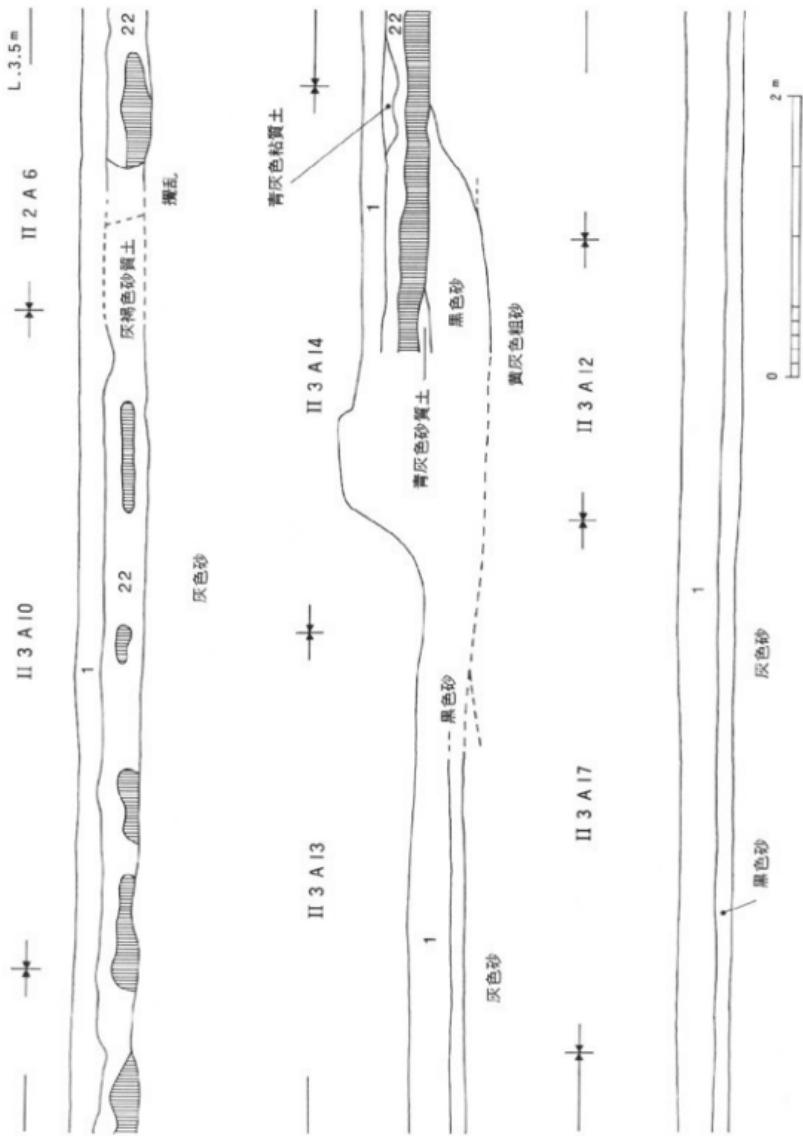


圖 8 調査區（東西）土層圖 3—2

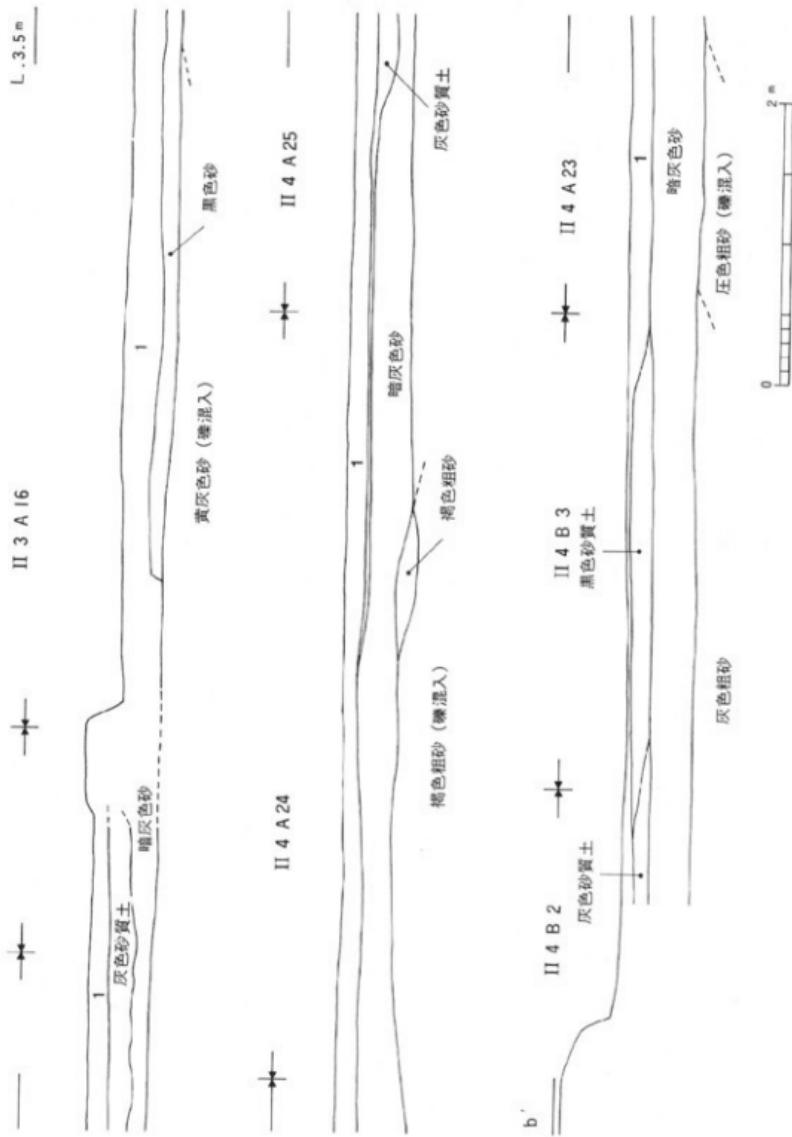


図 9 調査区（東西）土壠図 3—3

### III 遺構

#### 1 坑

坑は、I 2 A 4・5以南、II 2 A 3・8以東、II 1 B 3・4以北の範囲にまとまる。坑径は10cm未満のものから50cmにおよぶものまであり、深さは概して浅く、最も深いもので37cmを測る。

これらの坑は、埋積する土質と遺物から、弥生時代（中期以降）、古墳時代及び平安時代に区分できる。ただ、各時代ともその用途をあきらかにできるものはない。坑は一般的にみて、建物の柱穴と考えられるが、平面規模を推定するまではいたっていない。

各時代における坑のまとまりをみると次のようである。

##### a 弥生時代

I 2 A 4・5以南、I 2 A 15以北とII 1 A 12以南、II 1 B 3・4以北の2ヶ所にまとまる。坑内に黒色砂層が埋積し、高杯形土器(109)などが出土する。II 1 C 5の弥生時代後に埋積したとみられる植物層から出土した梯子(291)の存在からみて、坑群のいづれかが高床式の建物の柱穴であったと考えられる。坑径50cmほどで深さが30cm前後で、本遺跡内では比較的規模の大きいしっかりとした坑を、II 1 A 7・II 1 A 12で10ヶ所検出した。これらが建物の柱穴であった可能性が最も高いのであるが、その平面規模については不明である。

##### b 古墳時代

I 2 A 19・20以南、II 1 B 6・7以北とII 2 A 3・8以西にまとまる。坑内に茶褐色砂層が埋積し、上師器袋形土器(152)や須恵器杯蓋(225)と同形品などが出土する。

##### c 平安時代

II 1 A 13・14とII 3 A 10・15に数ヶ所あるのみ。坑内に黒色砂質土が埋積し、灰釉陶器が出土する。

#### 2 溝

溝状遺構は大小合わせて9条を数える。すべて調査区外へ続いており、部分的なものである。溝も坑と同じように時期区分することができる。弥生時代と古墳時代を通して、遺跡のフラットな面の縁に溝が設けられている。

##### a 弥生時代

溝4（II 1 B 8・9～II 1 B 14・15間にほぼ東西にのびる）は、丘陵下にある沼状地の凹みの肩に掘り込まれたもので、幅30cm～1m、深さ14cm～20cmの規模をもつ。掘り込ん

だ面からみて、この時期のものと推定される。

溝7（I 2 A 14～I 2 A 10間にほぼ東西にのびる）は、幅60cm～90cm、深さ9cm～15cmの規模。掘り込んだ面と埋積土が、この時期の坑と一致する。

#### b 古墳時代

溝8（I 2 A 4～I 2 B 25間にほぼ東西にのびる）は、幅90cm前後、深さ20cm前後である。須恵器の甕(224)などが出土している。

溝2（II 1 B 8～10間にほぼ東西にのびる）は、幅30cm前後、深さ18cmである。掘り込んだ面からみてこの時期のものと推定される。

溝5（II 1 B 8・9～II 1 B 14・15間にほぼ東西にのびる）は、溝2と平行し、溝4が埋積した上に設けられている。北側が浅くテラス状をなす。この部分の幅は1.2m、深さ20cmを測る。南側は幅2m、深さ50cmを測る。南側の肩に打ち込まれた木坑を1本検出した。掘り込んだ面からみてこの時期のものと推定される。

#### c 平安時代

溝6（II 1 A 6・7間にほぼ東西にのびる）は、幅1.1m～3.4m、深さ14cm～32cmの不整合なものである。溝の上を、鉄分を含んで形成されたとみられる非常に硬い茶褐色砂層が覆う。灰釉陶器の椀(246～251)などが出土する。

溝1（II 1 A 23・24間に）も不整合で、東へのびる。幅1m～1.3m、深さ20cmを測る。

溝3（II 1 B 19～II 1 B 10間にほぼ南北にのびる）は、幅30cm、深さ8cm前後を測り、灰白色砂が埋積する。

溝9（II 3 A 14・15、II 2 A 11間にのびる）は、東西にのびる方の幅20cm前後、これにつながり南北にのびる方の幅25cm前後で、深さはともに7cm前後を測る。灰白色砂が埋積する。

### 3 沼状の凹地

II 1 B 8・9・10ではほぼ東西にのびる溝2に平行する部分を肩として、その南方の丘陵地に向って沼状の凹地が存在する。最も深いところで、現地表面下約1.3mを測り、丘陵に近くなるにしたがって浅くなる。西端はII 1 C 2で終っている。沼地内には3層の植物層が埋積し、その下に樹木の枝が混在する砂礫層があって、基盤の礫層に至っている。礫層には、幹径10cmほどの立木が埋没していた。この基盤面からは、縄文時代中期末に比定される土器が出土した。

木製品類のはほとんどは、この凹地内およびその上面から出土した。

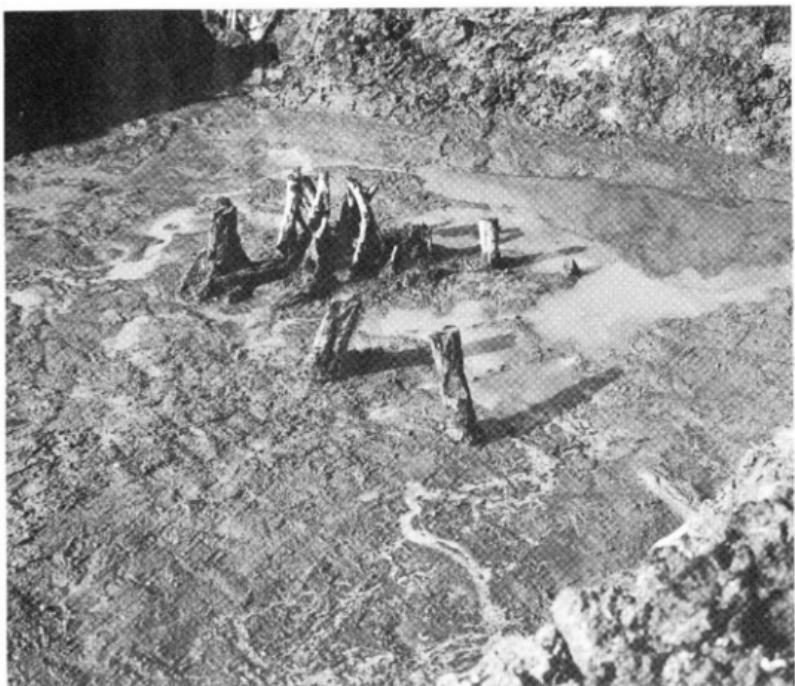
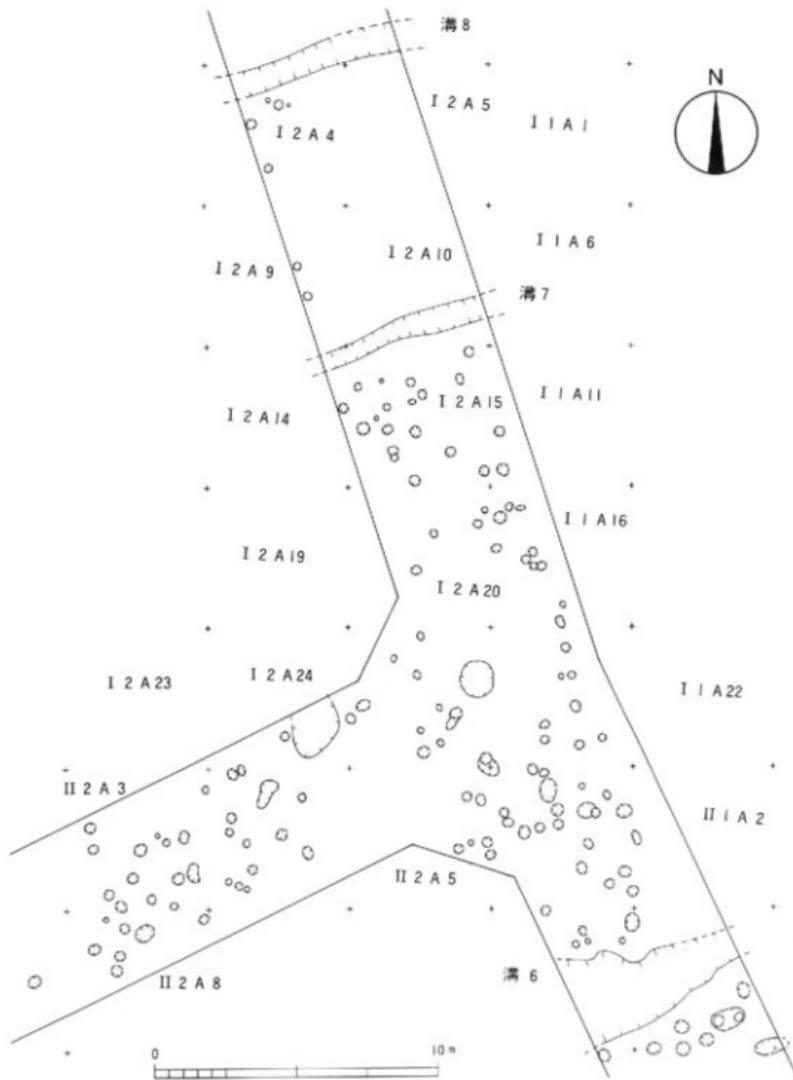


図10 II B 25検出埋没木



図II 調査区(IIA・I2A・II1A・II2A)実測図 2-1

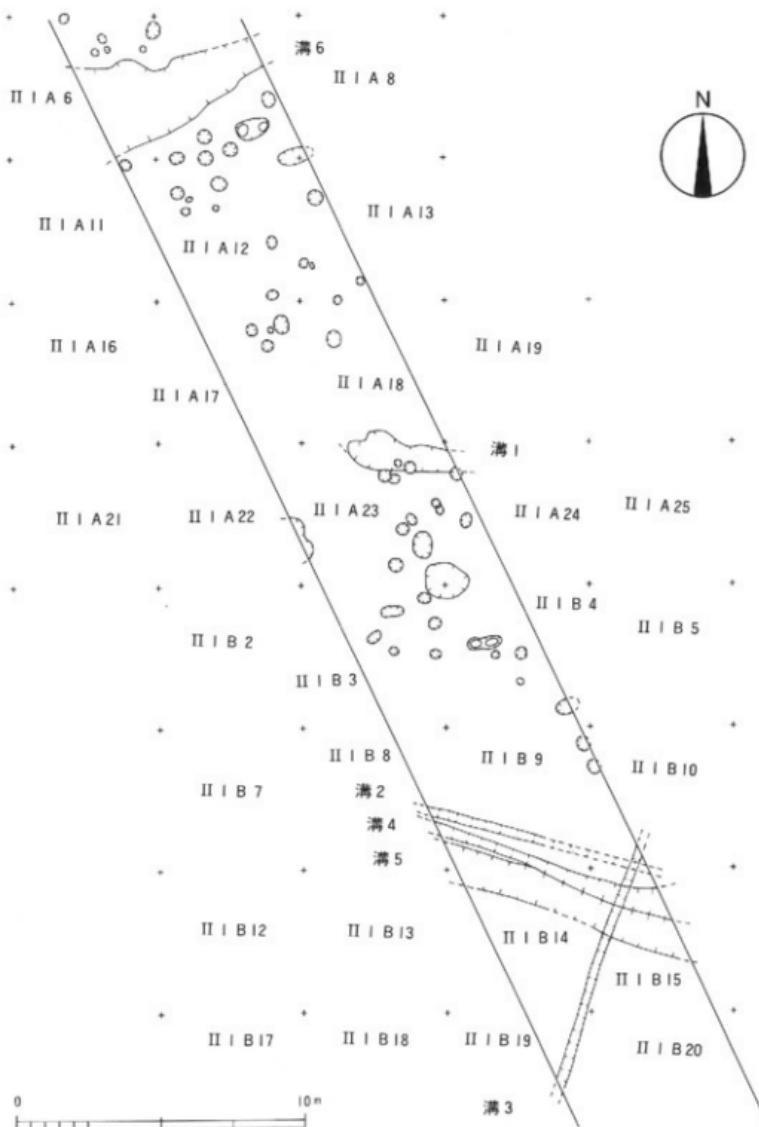
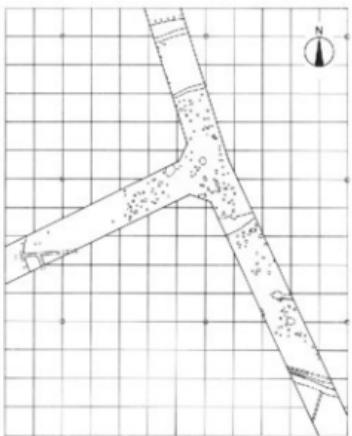
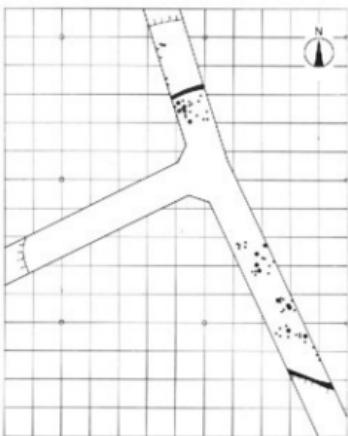


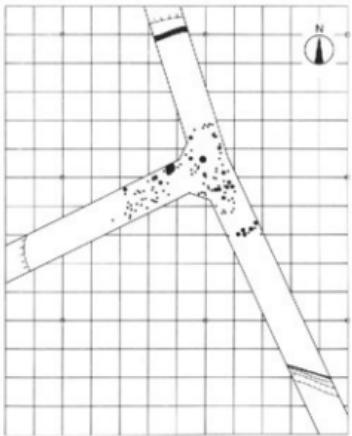
図12 調査区（IIIA・IIIB）実測図 2-2



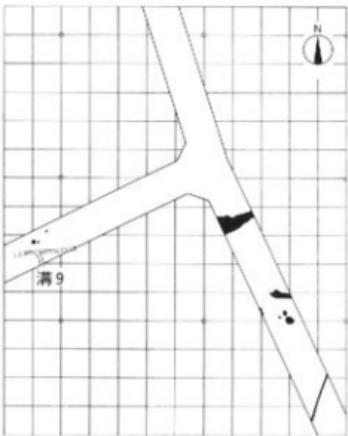
遺構全体図



弥生時代



古墳時代以降



平安時代末期

図13 坑および満の時期模式図

## IV 遺物

### 1 土製品類

#### a 縄文土器と土偶 (14図)

1は沈線文により羽状をなした縦杉を文様とした土器で、口縁部から上胴部を復元できた。口縁部を肥厚させ文様帯をつくり出し、そこに稜杉文をめぐらしている。また胴部には、縦位に3本の沈線を引き、2つの縱長の区画をつくり出し、そこに沈線による羽文を描いている。こうした胴部の文様を見る限り、中期末の土器群と近似することから、一応この時期に比定しておきたい。

2は、いわゆる磨消縄文土器である。後期中葉の土器と考えられる。

4は、波状口縁部に縄文を施した例で後期末葉の土器である。

3・8～11の土器は浅い横線文を口縁部に施した例で時期は、後期末から晩期初頭に位置づけられる土器である。また、5・7は半割竹管文により波文等を描いた土器で晩期初頭の寺津式に比定されよう。6は、この地方で類例の少ない資料で、やや文様構成等違うが豊田市神郷下遺跡に類例がもとめられる。やはり晩期初頭に位置づけられるのではないかと思われる。

13～15は肥厚した口縁部内に波文、押し引き文を施した土器で晩期中葉の元刈谷式に比定できる資料である。

20・22～32は器面に条痕文を施した土器で晩期の深鉢形土器の口縁部である。

土偶33は、体部は無文で、現存するのは右半身の腕部・胴部・脚部である。

#### b 弥生土器 (図15～図19)

第1群 (34～46) 器面を荒い条痕によって調整し、壺には描描の波状文をめぐらしたもので、前期の水神平式の特徴をもつ。無文の34・35・37・39もこの時期のものであろう。十数片出土するのみ。

第2群 (47～50) 47・48は水神平式の特徴をもち、口縁内面に構目文が加わる。49・50は口縁部が屈折して受口状になり、岩滑式の特徴をもつ壺である。ともに、中期の朝日式段階のものである。數片出土するのみ。

第3群 (51～74・76～78・101～105・107・108・111) 壺57・59、甕68は爪郷式の、甕70～73は獅子懸式の特徴をもつ。他は貝田町式の特徴をもつが、爪郷式のものを含め、文様の簡略化や器面調整がハケ目主体となっており、後出の様相を示す。中期の貝田町式の新しい段階の所産である。

第4群 (75・106・109・110) 甕106・75ともハケ調整の後、描描波状文を加えるもので

(注1)  
高藏式の特徴をもつ。把手 110は、高橋信明氏の分類によるB型に含まれるもので、この期の所産としてとらえておく。

なお、前群中の壺70~73、壺74・76・77・105・107、甕78・111などは、本群のものと伴出する事例があり、新しい様相をもつとの指摘がある。  
(注2)

第5群（112~114） 甕112・114は口縁部を「く」字状に外反し端部に面を作る。鉢113は口縁部と胴部にヘラ刺突列をめぐらす。後期の山中式の特徴をもつ。このほか、脚の柱部に櫛描横線をめぐらす高杯形土器がある。

第6群（79~84・115~127） 壺の口縁端部を幅広く作り棒状浮文をつけたもの116、さらに内側に羽状文をめぐらし丹彩を施したもの118や内外面にきれいにヘラ磨きをえたもの117などがある。甕は口縁部が受口状をなし、压痕列を加えたもの123・126などがある。後期の欠山式の所産である。

弥生土器の各群別の出土量をみると、第6群が多く、次に第3群である。

c 土師器（図19・20）

古墳時代前期（131~150） 壺131・133、高杯134・135・137~140、甕141~144は元屋敷式の特徴をもつ。壺の口縁を折り返したもの132や、浅い杯部をもち円形浮文をはりつける高杯136、および線刻文のある壺154~157も同時期のものであろう。

このほか、脚の下端が円盤状をなす高杯146・148、丸底の壺145・147、S字状口縁の甕149がある。

古墳時代後期（151~153） 甕151は、焼成後胴部に穴を設ける。甕152・153は長胸形をなす。これらの甕は、口縁部が強く外反し横にのび、荒いハケ目調整を施す8世紀代の薄手のものより古い時期の所産とみられる。

d 尖底（深鉢形）土器（図17）

85~100の尖底土器がある。口縁部と胴部が出土していないが深鉢形をなすとみられる。底部片を数えると全部で13個体分ある。出土範囲をみると、I 2 A 4-1個、I 2 A 15-1個、I 2 A 24-1個、I 2 A 25-5個、II 2 A 4-1個、II 1 B 15-1個、I 4 A 試掘え-3個と広範囲に及び、I 2 A にまとまりをもつ。

土器自体についてみてみると、胎土は砂粒を多く含み、外面をへうけずり、内面をナデて調整する。内面が薄く剥離するものが多い。色調は、橙色を基調とし淡橙色、紅色、黒色、桃色、褐色に部分的に変化する。これら土器自体の特徴は、茨城県広瀬遺跡出土の縄文時代晩期の製塙土器に類似し、注意をひく。なお、同類のものが、知多市細見遺跡においても1点出土している。時期は特定しえない。ただ、I 4 A 試掘えでみると、基盤の礫混入灰色砂層上に埋積する灰色粗砂層内に本資料が包含され、その上に埋積する黒褐色砂層から66をはじめとする水神平式の深鉢片が出土している。



図14 繩文土器・土偶実測および拓影図

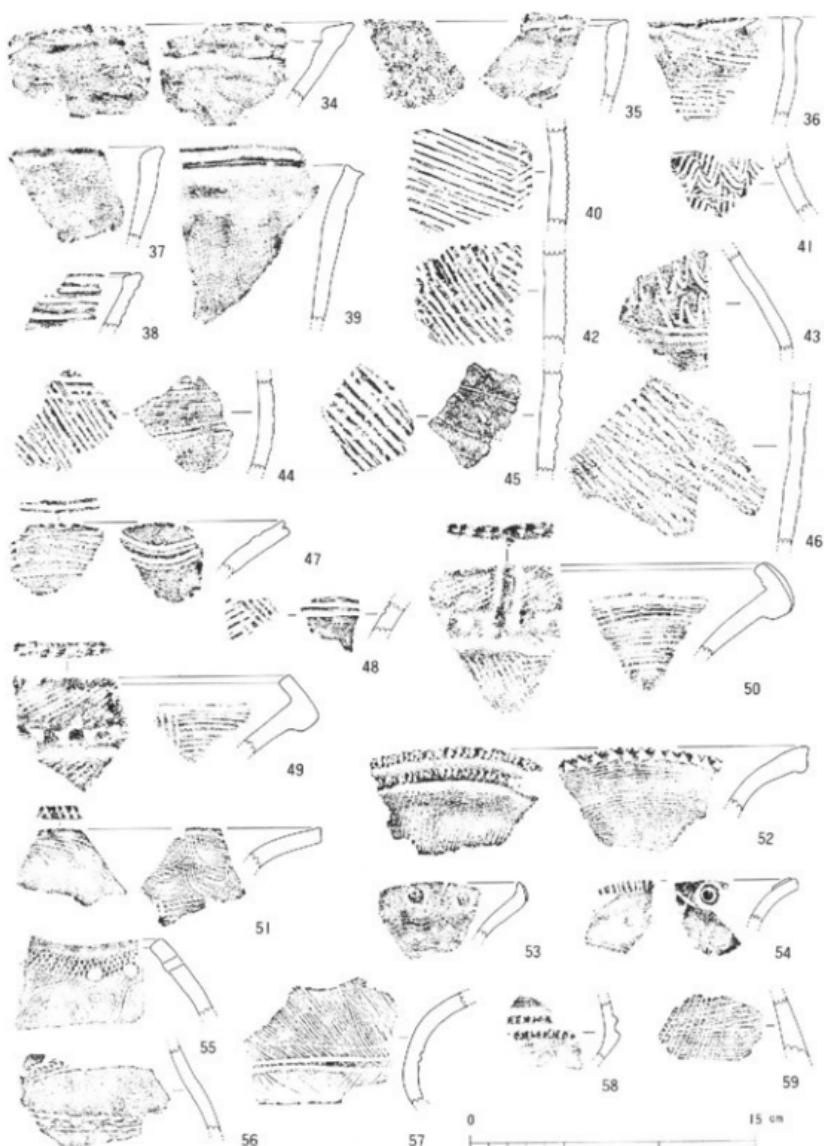


図15 弥生土器拓影図 I

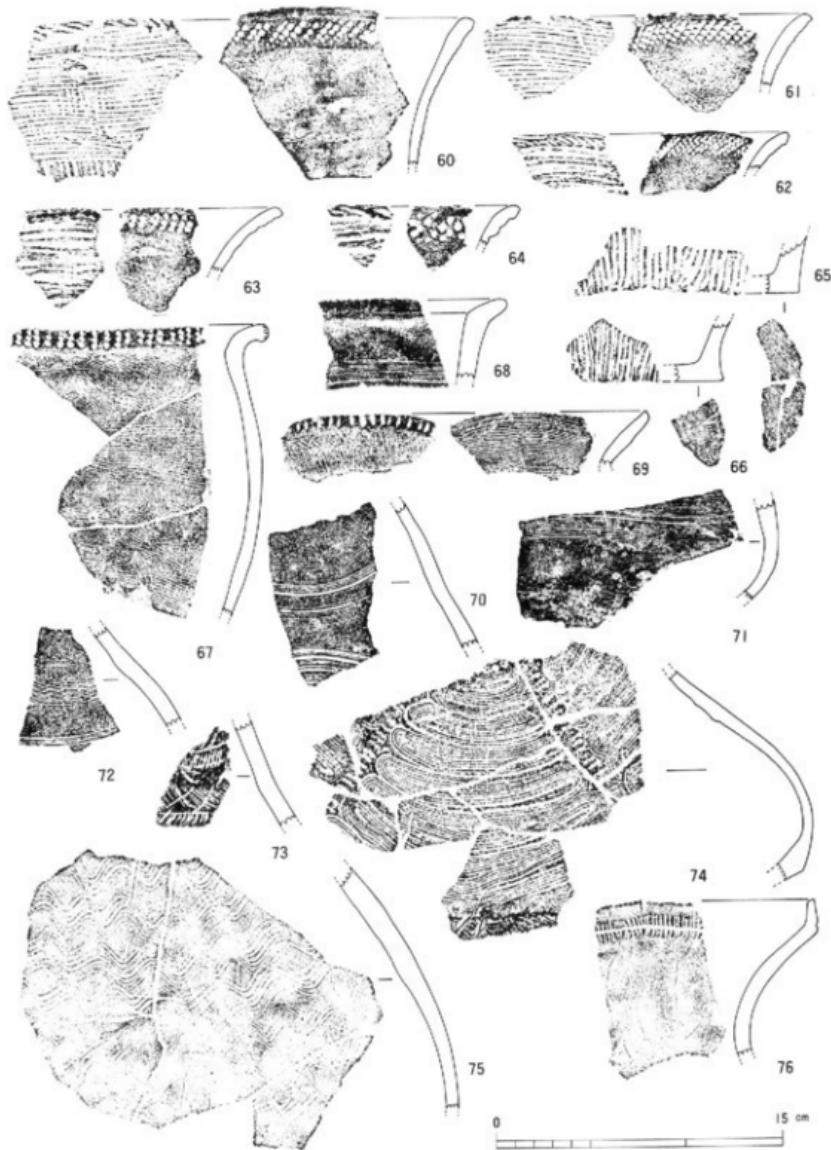


図16 弥生土器拓影図II

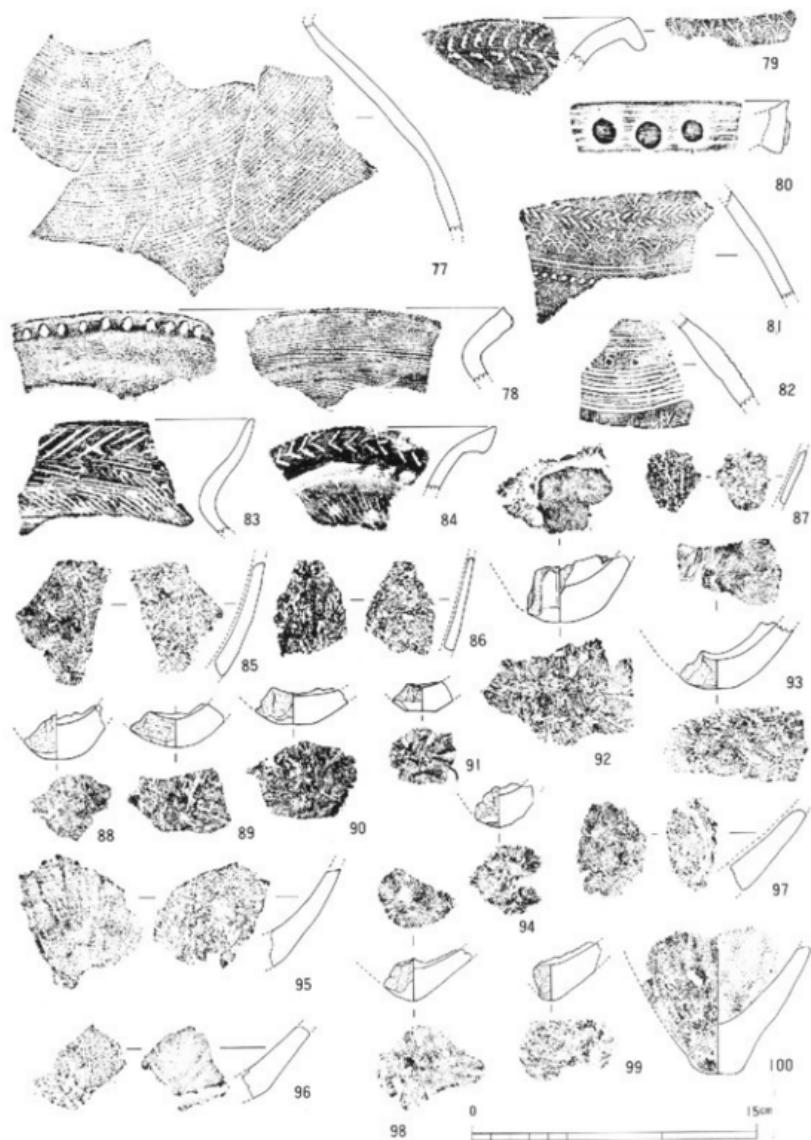


図17 弥生土器類拓影図III

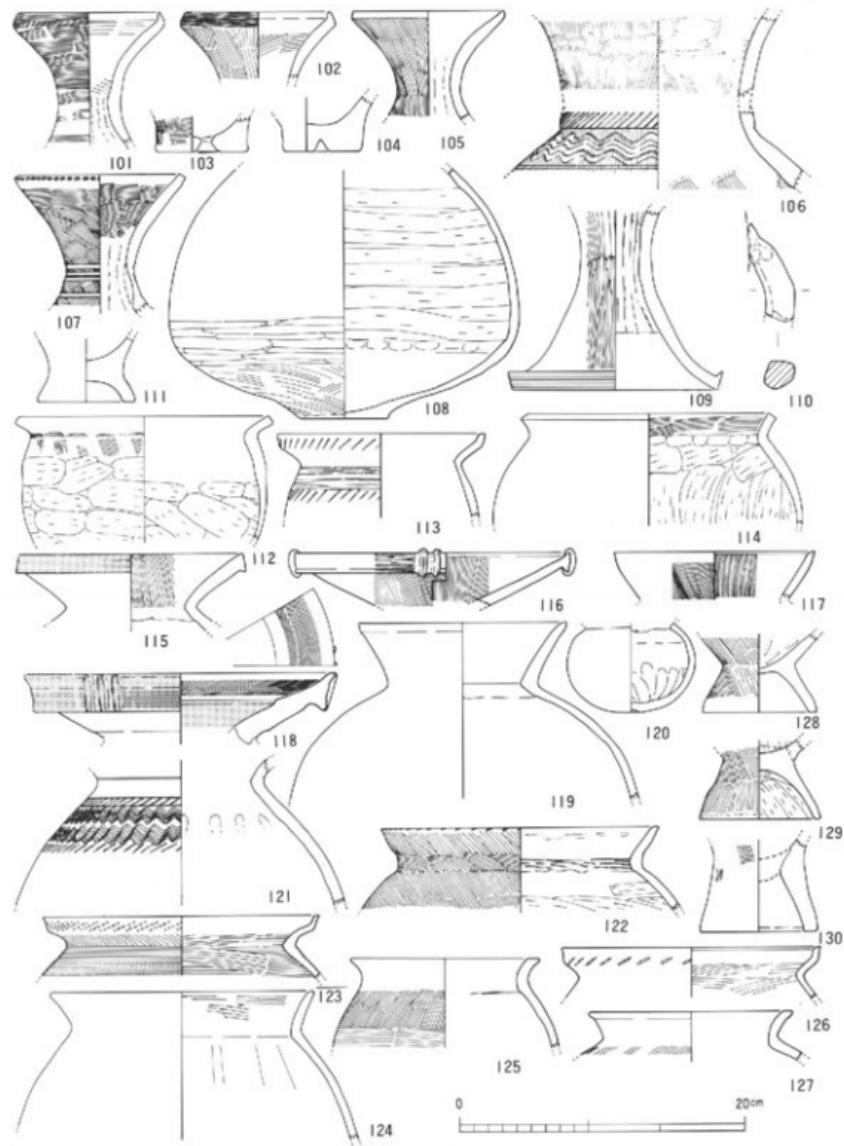


図18 弥生土器実測図

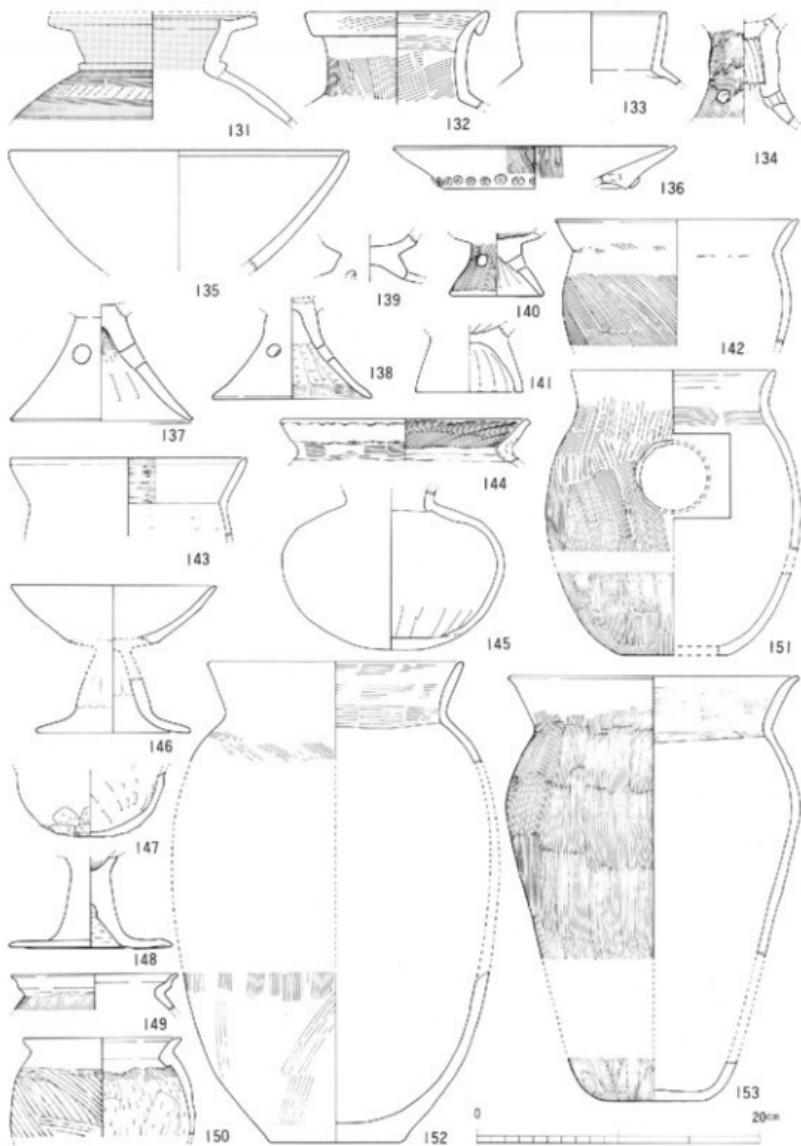


図19 弥生土器・土師器実測図

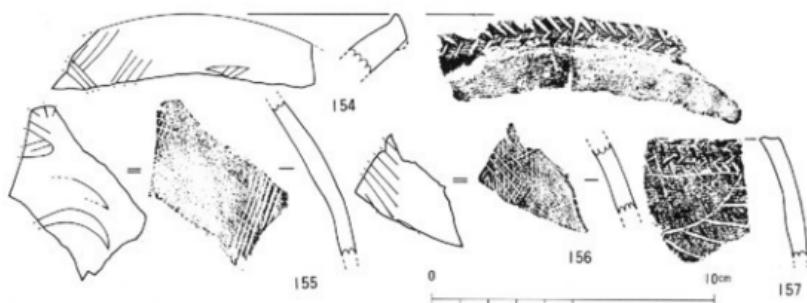


図20 線刻土器拓影図



図21 検出遺構 (▲溝 9 - 東から ▼ II 1 A 1・6・12方面 - 北から)

#### e 須恵器 (図23~図25)

(注5)

須恵器は、猿投窓編年を骨子として大きく6段階に区分してとらえると次のようである。

I期 杯蓋 159~161、杯身 162~164、高杯蓋は 158のはか、つまみが扁平で中央の凹むものがある。甌 210、高杯 228も器形からみてこの期のものであろう。数点出土するのみである。

II期〔6世紀〕 杯蓋に、立ち上がりが高くて古い様相をもつもの171~178と、短かくなつて新しい様相をもつもの179~183とがある。このほか、杯身171~183、甌220~222・224・225、甌229~236、甌211があり、この期の出土量が最も多い。

III期〔7世紀~8世紀前葉〕 杯蓋166・167、杯身184~187、立ち上がりがなくなり底面をへラ削りする杯身191・192、小型の杯身199、短頸甌208、甌212・213、高杯214~217、甌218・219などがある。このうち、杯蓋166・167、杯身184~186が東山50号窯式の、杯身187・189、甌193、短頸甌208、甌212・213、高杯216が岩崎17号窯式の所産である。

IV期〔8世紀中葉~9世紀中葉〕 杯蓋188~190、杯身194~198・200~207、甌209がある。このうち、II 1 B 25から出土した無台杯身195・196に墨書きがある。196は「木」と書かれ、195は「示」偏か「木」のようである。

この期とした杯身類には、次期のV期〔9世紀後葉~10世紀前半〕の所産になるものも含まれていると思われる。

#### f 円筒埴輪 (図25)

I 4 A 13の用水内で円筒埴輪を探集した。須恵器のもので円形の透孔とたがをもつ。この付近は、用水を境にして南と北の水田面に約1mの段差が認められる。未調査のため詳細は不明である。

#### g 灰釉陶器 (図26)

楕241~253、瓶254、段皿255~256、皿257、耳皿261がある。猿投窓編年のVI期(10世紀後半~11世紀)の所産である。このうち、楕241、247、252、皿255・257は美濃窑の製品とみられ、楕252が大原2号窯式、他が虎渓山1号窯式のものとみられる。耳皿261は白代寺窯式である。

楕243~245と瓶254は、下駄307とつち306およびつちを打つための台石にしたとみられる丸い石とともに出土した。

#### h 級釉陶器 (図26)

尾北窯の蘿岡4号窯式の段皿小片258が1点ある。

#### i 瓷器系中世陶器 (図34)

小皿259・260・264、耳皿262、山茶楕263がある。小皿259・260と耳皿262は器形からみて12世紀前葉頃のものである。山茶楕263は、緻密な胎土のいわゆる均質手のものである。小皿264とともに器形からみて13世紀中葉頃のものである。

j 土錐（図26）

大小合わせて全部で10個ある。239が須恵質のほかはすべて土師質である。

k 製塙土器（図26）

知多式製塙土器4類275～286が11個体分ほど出土している。出土範囲は、I 2 A 20-1個、II 3 A 14-2個、II 3 A 15-1個、II 1 A 23-1個、II 1 B 14-1個、II 1 B 25-2個、II 1 C 1-1個に及ぶ。出土量が少量なことからみて、生産地から土器ごと搬入されたものであろう。

l 瓦（図26）

凸面に繩叩きを施し、凹面に布目压模の残る丸瓦287と平瓦288がある。

m 土師質土器（図26）

内耳鍋289、羽蓋290の小片がある。

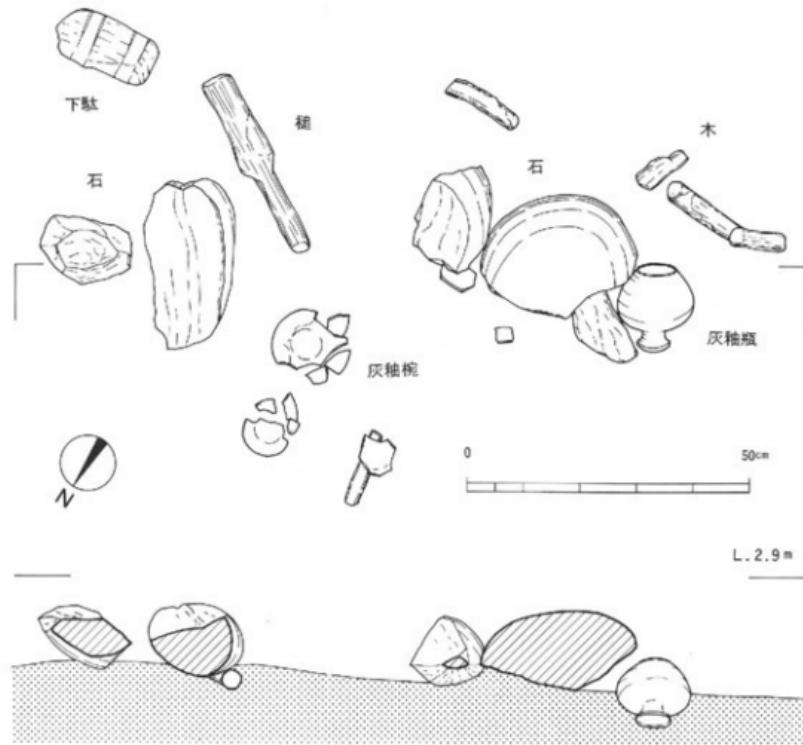


図22 II 1 B 20区内灰釉陶器・木製品および石出土状態実測図

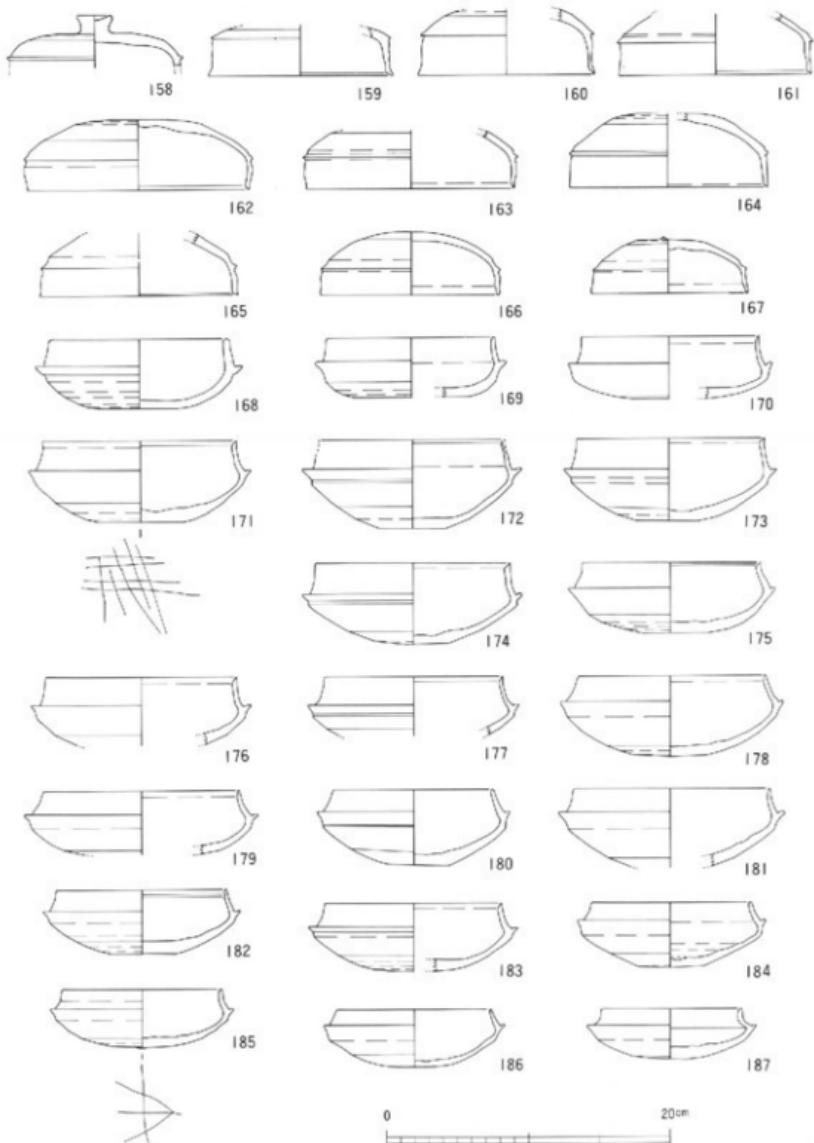


図23 須恵器実測図 I

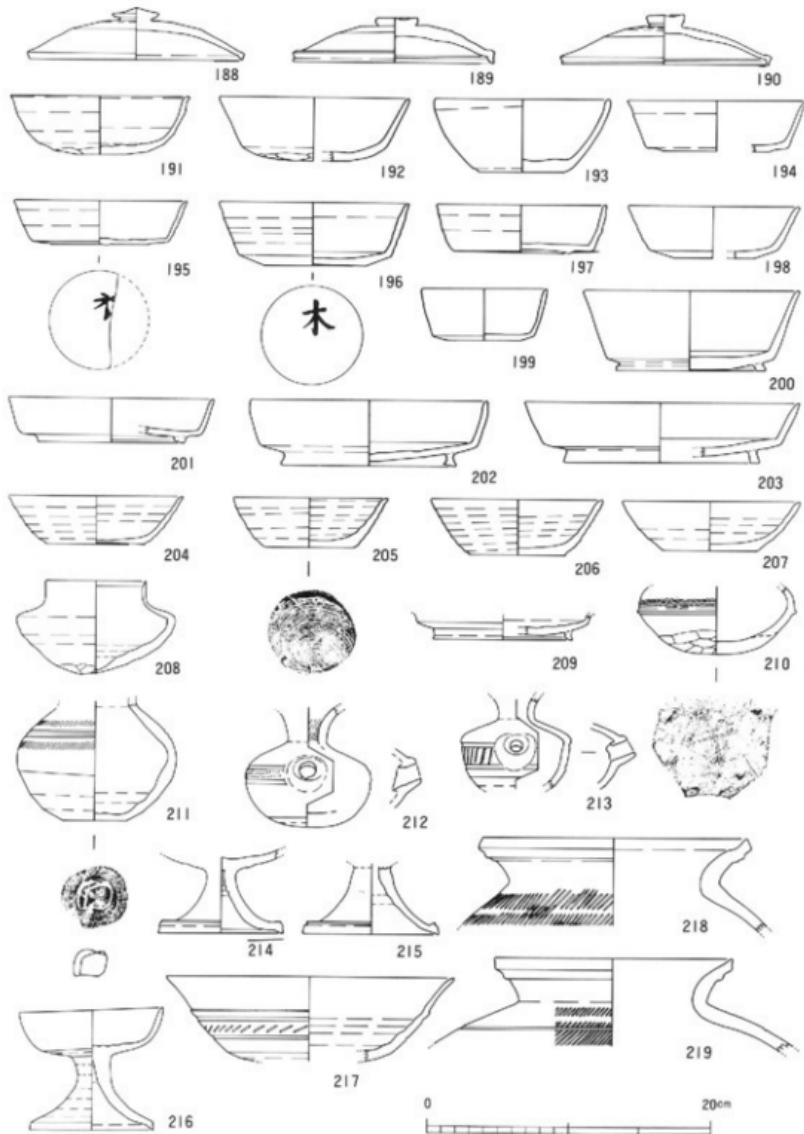


図24 須恵器実測図II

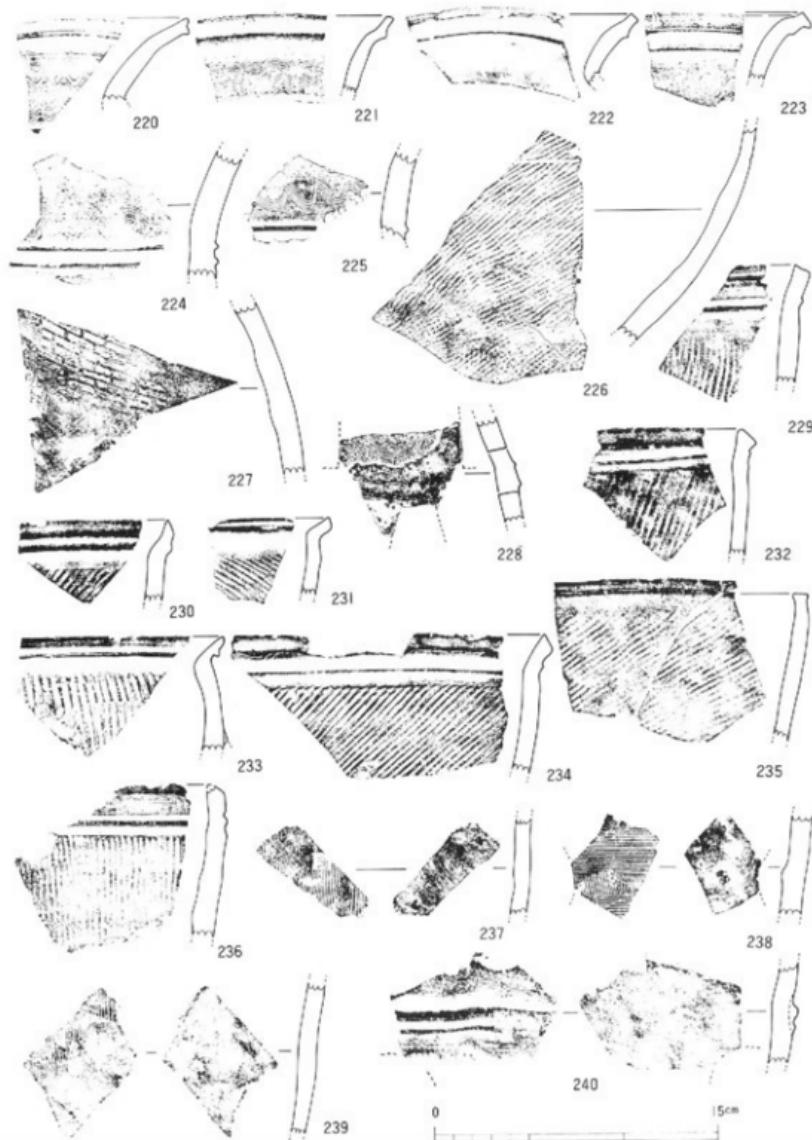


図25 須恵器・円筒埴輪拓影図

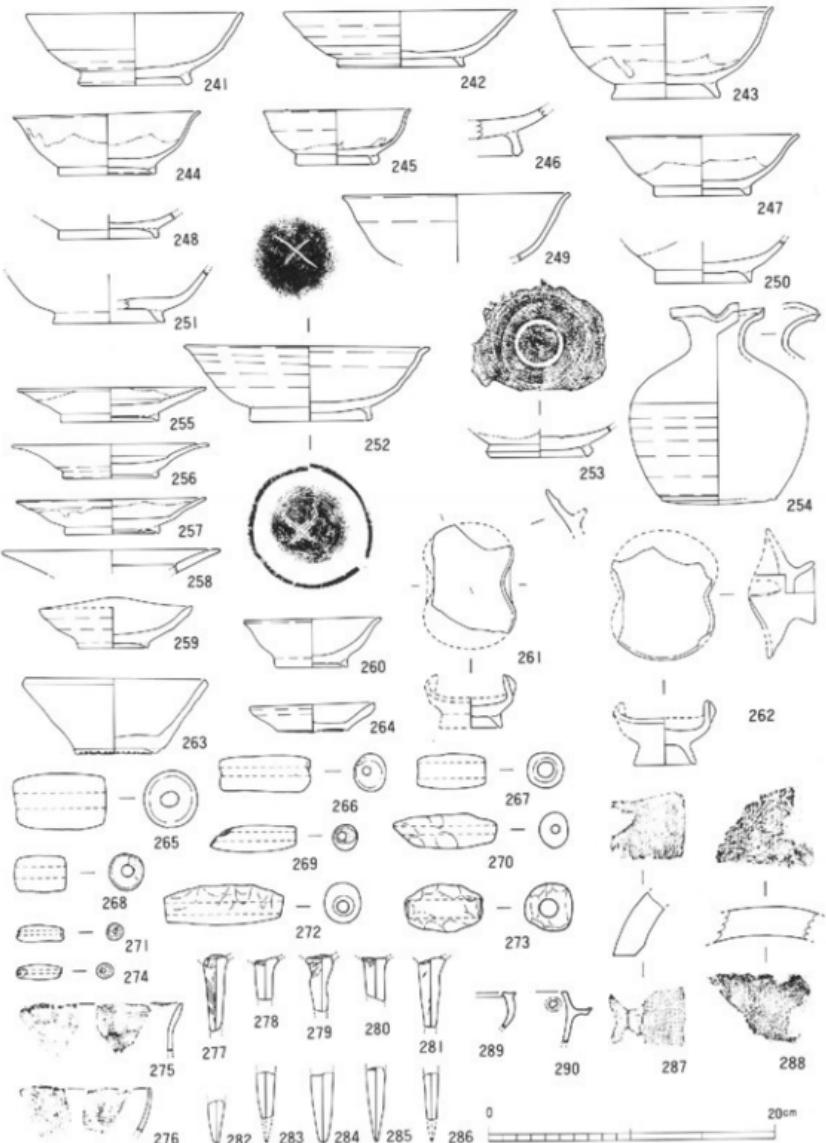


図26 圧釉陶器・土製品類実測図

## 2 木製品類 (図28・図29)

すべてII 1 B 14・15以降から出土した。用途の不明なものが多い。以下、調査の所見による時代別にみてみる。ただし、包含層が薄く、同一層内に他時期の遺物もあり、かつ、調査の不備により混在している可能性が大であることを記しておく。

### a 弥生時代以前

292は突起部分に溝をもつものである。II 1 C 9 の植物混入砂礫層(図5-7層)から出土。

### b 弥生時代後期

梯子とみられるもの291がある。II 1 C 5 の黒褐色植物層(図5-4層)から出土したもので、この下に埋積する灰色砂層上面で弥生土器壺106が出土しており、これよりは新しい時期のものとしてとらえられる。

### c 古墳時代後期～奈良時代

曲物底板293、箸301・302、かせ304、用途不明の294~297・299・300・303・308・310がある。須恵器III期の岩崎17号窯式を主体とする黒色植物層(図5-3層)から出土しており、この時期のものとみられる。

### d 平安時代後期

つち 306、下駄 307、用途不明の298・305・309・311~318がある。灰釉陶器の折戸53号窯式を主体とする黒色砂質土層(図5-11層)から出土している。

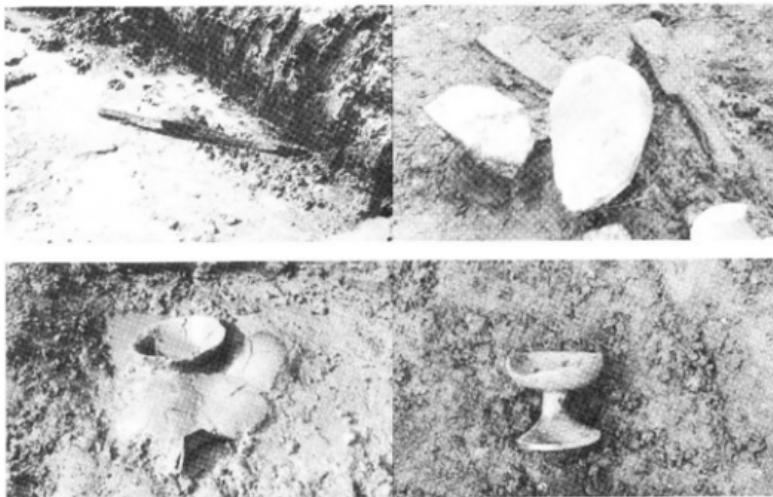


図27 遺物出土状況(△はしご, ▲つち・下駄, ✓土師器, ×須恵器)

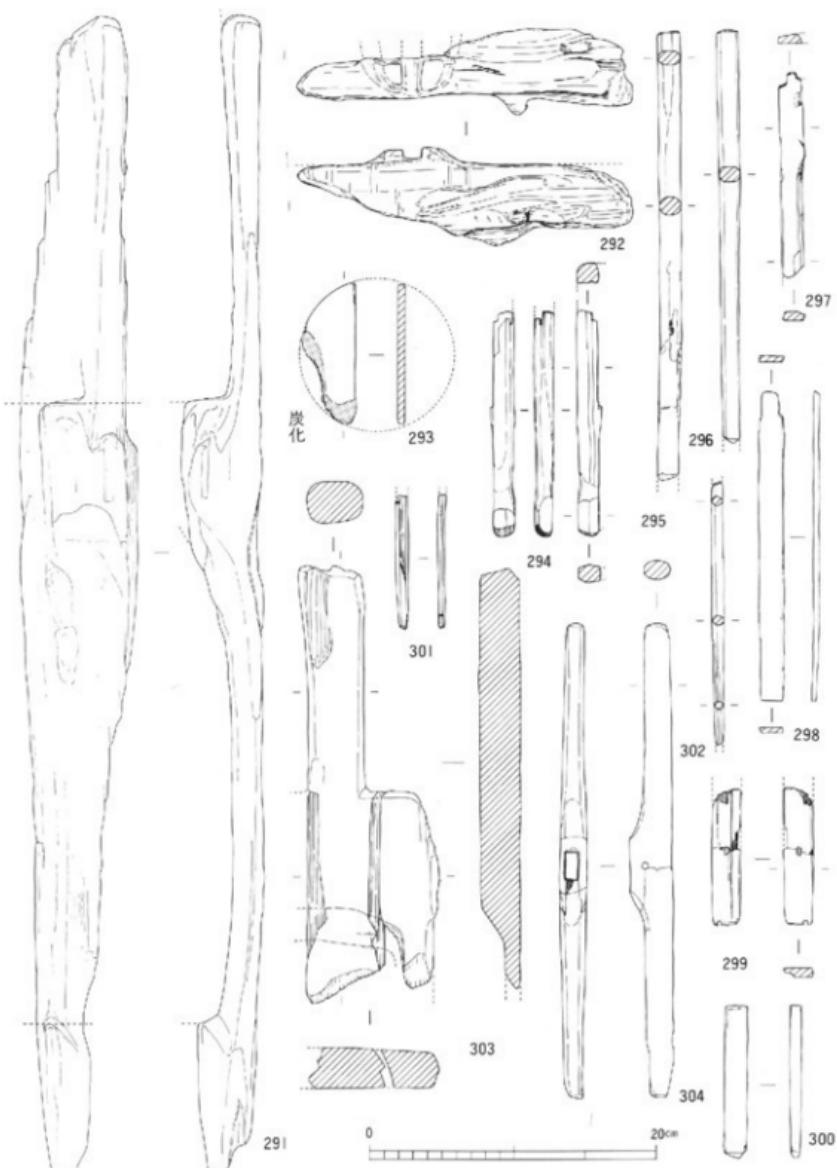


図28 木製品類実測図 I

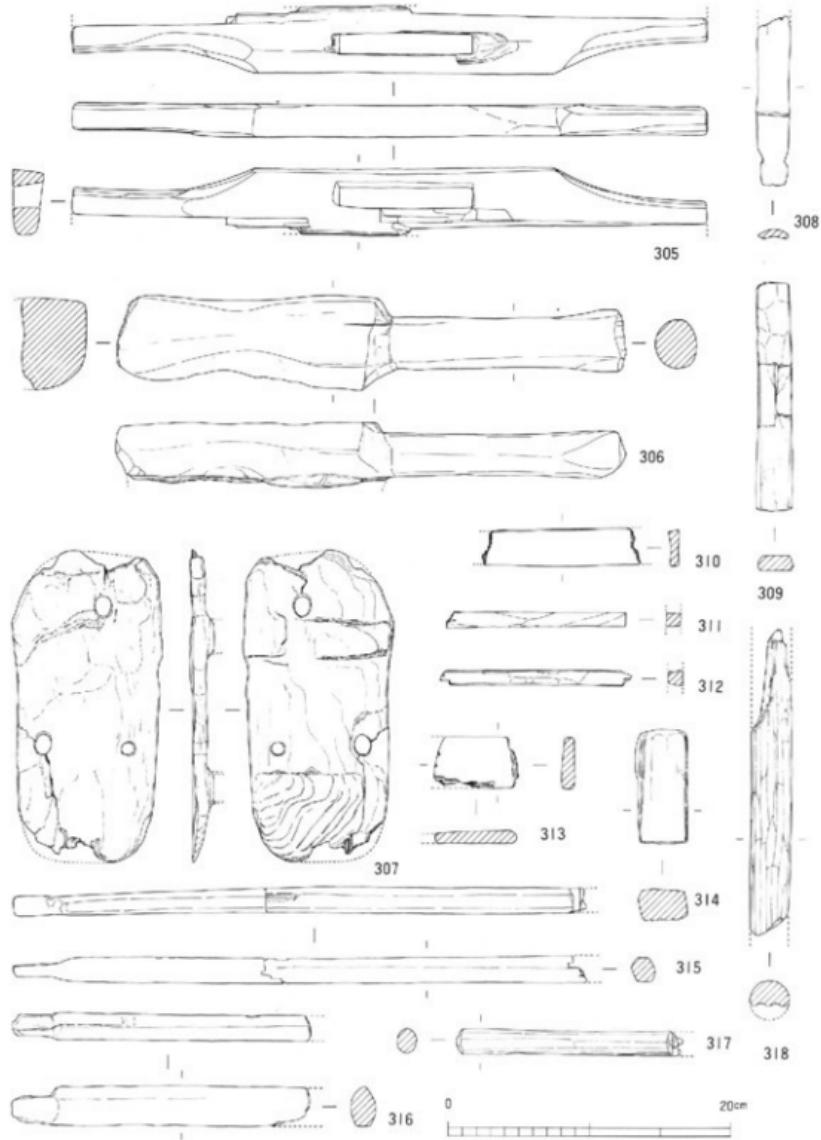


図29 木製品類実測図 II

## 5 金属製品類

刀子が1本、II 2 A 7灰色砂層から出土している。

天元通宝が1枚、II 1 B 15黒色砂質土層から出土している。直径 2.5cm、厚み1.2mm、内側の方形7mm角を測り、一部欠損する。

## 4 動・植物遺体

動物遺体としては、シカの歯が1点、II 3 A 14黒色砂層から出土している。

植物遺体については、付編で述べる。ここでは、資料採集の方法について触れておく。

資料番号1～4は、II 1 B 25の西壁セクション（図5の土壤サンプリング地点）において、色調と組成によって分層した黒色植物層（図5－3層）、黒褐色植物層（4層）、灰茶色植物層（6層）、植物混入砂礫層（7層）の4層から、縦横25cm、厚10cmの土壤をサンプリングして、その中から肉眼によって抽出した。資料記号A～Dのうち、A・C・DはII 1 B 25黒色植物層から、BはII 1 C 黑褐色植物層から発掘調査時に採集した。

付編にみる資料は、このようにして、抽出・採集したものについて、高木典雄先生から研究成果をいただいた。

### 注

- 1 高橋信明 1984 愛知県朝日遺跡出土の把手付土器 マージナルNo.4 談話会 P.5～P.8
- 2 石黒立人 1983 阿弥陀寺遺跡まとめ 環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報I (財)愛知県教育サービスセンター P.45～P.47  
石黒立人、宮腰健司、安藤義弘 1984 阿弥陀寺遺跡出土の中期弥生土器について－1 環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報II (財)愛知県教育サービスセンター P.110～P.121
- 3 中野晴久 1984 細見遺跡出土の弥生式土器 愛知県知多市八幡細見遺跡第二次発掘調査 知多市教育委員会 P.31～P.34
- 4 近藤義郎 1962 繩文時代における上器製塙の研究 岡山大学法文学部学術紀要第15号
- 5 杉崎章、磯部幸男 1982 知多市八幡細見遺跡 知多市教育委員会 P.12
- 6 植崎彰一、斎藤孝正 1983 猿投塙の発掘について 愛知県古窯跡群分布調査報告(III) 愛知県教育委員会 P.62～P.73  
なお、須恵器・灰釉陶器等について、名古屋大学文学部考古学助手の斎藤孝正氏に御教示いただいた。



図30 出土遺物 I 土偶・縄文土器 1・尖底土器底部・須恵器杯身  
左171・右173・高杯216・墨書195・196

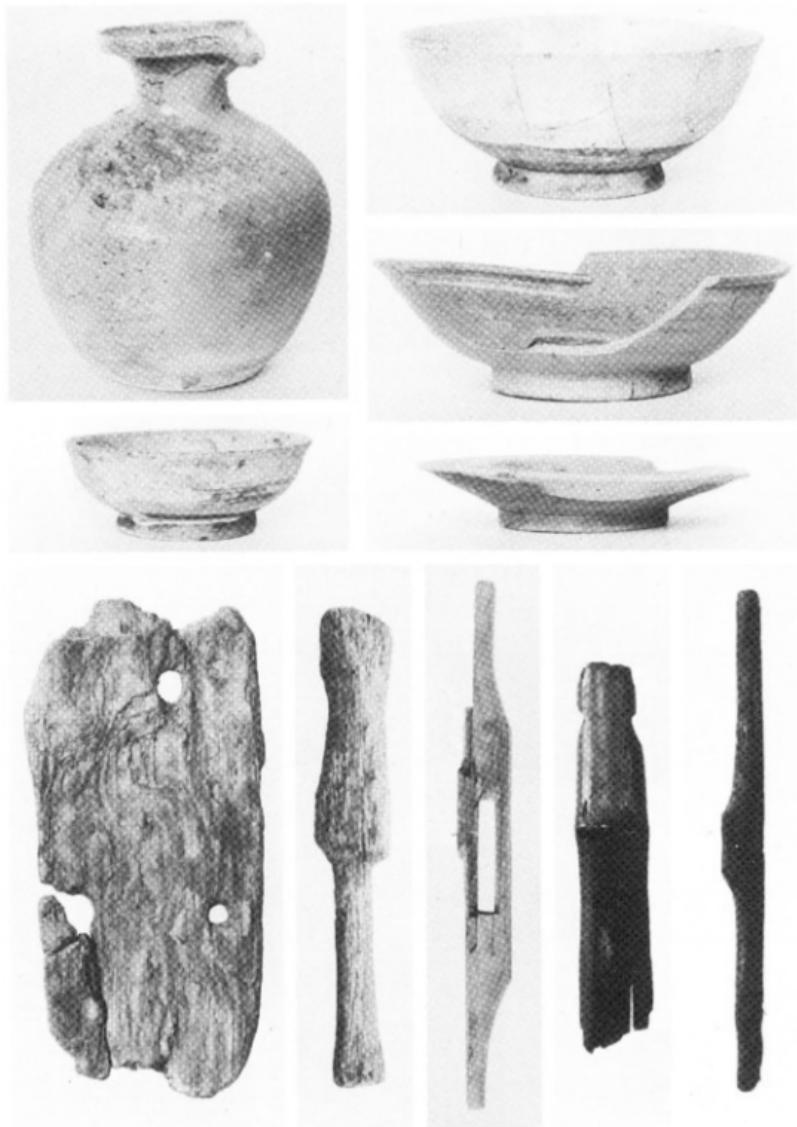


図31 出土遺物II 灰陶器瓶254・小椀245・椀244・椀252・段皿255・木製品類下  
駄・つち・部材305・竹製部材308・かせ304

掲載遺物観察表

種別	出土区・層位	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
縄文	深鉢 II 1 C 10 黒茶色植物層	1	口径 34.8	複合口縁部に沈線による横位の綾杉文がめぐり、副部にも綾杉文が縦位に7ヶ所ある。	黒色。砂粒多く脆弱である。
	深鉢 II 1 B 3 黒色砂層	2	厚 0.4	幅 0.8cmの帯状の区画文内に右下りの繩文を施文している。	黄白色。砂粒を多く含む。
	深鉢 II 1 B 15 黒色砂層	3		口端部から8mm前後の間隔で3本の横位にひかれた沈線がある。施文具は半割竹管。	黄白色。
	深鉢 II 1 B 14 黒色砂層	4	厚 0.5	口縁部は波状をなし、ゆるやかに内湾する曲面をもつ。口縁部下方に低い凸帯を貼りつけている。この凸帯と口唇部間に左下がりの繩文を施文している。	赤褐色。
	深鉢 II 1 B 19 黒色砂層	5	肥厚部厚 1.0	口縁部は波状をなし、ゆるやかに内湾する。波頭部から下に4つの刺突文がある。波状口縁部に沿い半割竹管による3条の沈線があり、肥厚した口縁下部に同様な沈線が1条めぐる。	灰色。
土	深鉢 II 1 B 14 黒色砂層	6	厚 0.6	口縁部は波状をなし、ゆるやかに内湾する。波状となった面の口縁部に沿い1条の細い沈線がひかれる。上方に2条1単位とした沈線、その下部に同様に「く」字状の沈線がある。また、平縁となった部位には、やはり2条1単位の銀巻状の沈線がある。この中に口軒部から3つの刺突文がある。これらの文様下部に横位に1条の沈線がひかれ文様帶を区画している。	赤褐色。
	深鉢 II 1 B 9 黒色砂層	7	厚 0.5	内湾する口縁をもつ。口縁部に沿い2条1単位の細く鋭利な沈線が平行にひかれ、その下部に同様な沈線が波状をなしてひかれている。	灰色。器表面を丁寧にみがく。
器	深鉢 II 1 B 14 黒色砂層	8	厚 0.5	内湾する口縁をもつ。7条の浅い条線をもつ。	灰白色。
	深鉢 II 1 B 15 薄4内	9	厚 0.7	波状口縁。3条の浅い条線が横位にひかれる。	褐色。
	深鉢 II 1 B 20 黒色砂層下	10	厚 0.5	3条の浅い条線が横位にひかれる。	茶褐色。
	深鉢 II 1 B 15 黒色砂層	11	厚 0.7	3条のやや深い沈線が横位にひかれる。	茶褐色。

種別	出土区・層位	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
深鉢	II 1 B 3 黑色砂層	12		幅3cm、厚さ1cm前後の肥厚した口縁部をもつ。口縁部は無文。この下部に浅い条線が2条ひかれる。	黄白色。
深鉢	II 1 B 15 黑色砂層	13		幅3.5cm、厚さ1cm前後の肥厚した口縁部をもつ。口縁部には半削竹管による直線に近い波状文が3単位、ほぼ全面に横位にひかれる。	黄白色。
縄文	深鉢 溝 5 内	14		幅3.2cm、厚さ1cm前後の肥厚した口縁部をもつ。施文は13の十器とほぼ同様であるが、波の振幅が短い。上から1単位目と2単位目の波文の間に其による疑縄文がひかれる。	灰色。
	深鉢 II 1 B 9 黑色砂層	15		幅3.4cm、厚さ7mm前後の肥厚した口縁部をもつ。口縁部施文は、半削竹管文による押引文が横位に3単位施される。	灰色。
文	深鉢 II 1 B 3 黑色砂層	16		幅2.7cm、厚さ1cm前後の肥厚した口縁部をもつ。口縁部は無文。	黄白色。
	深鉢 II 2 A 7 灰色砂層	17		口唇部の内面を「く」字状にし、外面をやや外に聞く形をしている。無文。	褐色。胎土はち密である。器表面に丁寧なみがきを施す。
土	深鉢 II 1 B 14 黑色砂層	18	厚 0.4	口縁部をやや外反させた無文土器。	褐色。
	深鉢 II 1 B 9 黑色砂層	19	厚 0.5	波状口縁の無文土器。	赤褐色。胎土はち密。器表面に丁寧なみがきを施す。
器	深鉢 II 1 B 14 黑色砂層	20		外面全体に横位の条痕文がみられる。	褐色。砂粒を含む。
	深鉢 II 1 B 4 黑色砂層	21	厚 0.8	器底全体に巻貝による調整痕がみられる。	灰褐色。
深鉢	II 1 B 3 黑色砂層	22	厚 0.8	器底全体に巻貝による調整痕がみられる。	灰色。
深鉢	II 1 B 20 黑色砂層	23		口縁部がやや肥厚する。摩滅して調整痕がみられる。	赤褐色。
深鉢	II 1 B 15 黑色砂層	24		口唇部をやや肥厚させる。右ドリの条痕がみられる。	暗灰色。

種別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
縄文	深鉢 II 1 A 7 黒褐色砂層	25	厚 1.0	横位の条痕文がみられる。器表面摩滅。	黄白色。
	深鉢 II 1 A 7 黒褐色砂層	26		器表面摩滅。	灰色。25と同一個体と思われる。
	深鉢 II 1 B 15 黒色砂層	27	厚 0.7	口唇部は平らに成形されている。右下りの条痕文が器体外周全体にみられる。	黒灰色。
	深鉢 II 1 A 7 黒褐色砂層	28		口唇部を7mm前後に肥厚させる。右下りの条痕文が器体外周全体にみられる。	黄白色。
	深鉢 II 1 B 14 黒色砂層	29	厚 0.5	器体外周に横位の浅い条痕を施す。	褐色。
	深鉢 II 1 B 14 黒色砂層	30	厚 0.7	口唇部は平らに成形されている。器体外周に横位・右下りの条痕を施す。	褐色。
	深鉢 II 1 B 15 黒色砂層	31		器体外周に整った条痕を右下りに施す。	黒灰色。
	深鉢 II 3 A 15 灰色砂層	32		器体外周に幅の広い条痕を施す。	灰褐色。
土偶	II 1 C 10 黒褐色植物層	33	長 (14.0) 厚 2.2	右半身。成形は、縦長の2本の粘土棒を左と右の半身として合わせて、繰り目で粘土を充填して胴体を作り、それに頭部と腕を付けたとみられる。乳房らしい痕跡も認められる。	黒褐色。砂粒を多く含む。
甌生土器	深鉢 II 2 A 7 灰色砂層	34		体部内外面ともナデ。	淡橙色。砂粒を多く含む。
	深鉢 II 3 A 14 黒色砂層	35		体部外面剥落。内面ナデ。	淡橙色。砂粒を多く含む。
	深鉢 I 1 A 21 茶褐色砂層	36		体部外面条痕。内面ナデ。	淡橙色。砂粒を多く含む。
	深鉢 II 1 B 15 薄 5 内	37		体部内外面ともナデ。	淡茶色。砂粒を多く含む。
	深鉢 I 2 A 9 灰色砂質土層	38		体部外面条痕。内面ナデ。	淡橙色。砂粒を多く含む。
	深鉢 I 1 A 21 茶色砂層	39		体部内面と口端部ナデ。外側へラケすり。	淡橙色。砂粒を多く含む。

種別	出土X ・層位	団版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
跡	深鉢 茶色砂層	I 2 A 25 40		体部外面荒くて深い羽状条痕。内面ナデ。	棕色。砂粒を多く含む。
	壺 茶色砂層	I 2 A 25 41		体部外面条痕に波状文を加える。内面ナデ。	灰黄色。砂粒を多く含む。
	深鉢 灰色砂層	II 3 A 14 42		体部外面荒くて深い条痕。内面ナデ。	淡灰色。砂粒を多く含む。
	壺 黑色砂層	II 3 A 14 43		体部外面波状文。内面ナデ。	白灰色。砂粒を多く含む。
	深鉢 黒色砂層	II 1 A 7 44		体部外面荒い条痕。内面へラけずり。	淡褐色。砂粒を多く含む。
	深鉢 灰色砂層	II 3 A 14 45		体部外面荒くて深い条痕。内面ナデ。	淡黄色。砂粒を多く含む。
	深鉢 黒褐色砂層	I 4 A 16-21 46		体部外面荒い条痕。内面ナデ。	試掘溝C出土。黒色。砂粒を多く含む。
	壺 黑色砂層	I 2 A 25 47		口端に沈線を1条めぐらす。口縁内面条痕の弧線。外面横位の条痕。	灰褐色。砂粒を多く含む。
土	壺 灰色砂層	II 3 A 14 48		体部外面羽状条痕。内面にも条痕。	淡橙色。砂粒を多く含む。
	壺 灰茶色植物層	II 1 B 25 49		口縁部が受口状をなす。口端に押引文をめぐらす。体部内外面とも条痕。外面の屈曲部に指圧痕。	黒褐色。砂・礫を多く含む。
	壺 灰茶色植物層	II 1 B 25 50		口縁部が受口状をなす。口端に押引文をめぐらす。体部内外面とも条痕。口縁帶に捺状浮文を付す。外面の屈曲部に指圧痕をめぐらす。	黒褐色。砂・礫を多く含む。
	壺 茶色砂層	I 2 A 20 51		口端に捺痕の押引文をめぐらす。内面捺描連弧文。体部外面ハケ目。	淡橙色。砂粒を多く含む。
器	壺 灰色砂層	II 2 A 7 52		体部内外面ハケ目。口端内面三角形の刺突文、外面アナグラ属貝殻腹縁による刺突文。	淡橙色。砂・礫を含む。
	壺 茶褐色砂層	I 2 A 15 53		口縁部がわざかに受口状をなす。体部外面口端に円形の中に凹を押す浮文をめぐらす。その下に捺描の波状文と横線をめぐらす。	黄白色。砂粒を多く含む。
	壺 黑色砂層	II 3 A 14 54		口端に割み目。内側に円の刺突を加えた円形浮文を付す。	淡灰色。砂粒を多く含む。

種別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
甌	無底甌 II 1 A 7 黒色砂層	55		体部外面ともナデ。外面にアナグラ属の貝殻腹縁による刺突文とその下に梯形連弧文をめぐらす。	淡黄色。砂粒を多く含む。
	甌 II 1 A 7 黒色砂層	56		ヘラ書きの沈線間に押引文を重ねる。	黒色。砂粒を多く含む。
	甌 I 2 A 25 茶褐色砂層	57		頸部外側はね上げの拵目に3条の沈線がある。内面ナデ。	淡褐色。砂粒を多く含む。
	甌 II 1 B 3 黒色砂層	58		頸部に凸帯を2条めぐらし、刺突を加える。外面ヘラみがき、内面ナデ。	淡褐色。砂粒を多く含む。
	甌 I 2 A 15 黒色砂層	59		胴部片。外面横のハケ目の上にヘラ書きの縱線を加える。内面ナデ。	黒色。砂粒を多く含む。
	甌 I 1 A 16 茶褐色砂層	60		体部外面条底、内面ナデ。口縁部内面に梯形押引文をめぐらす。	黒褐色。砂粒を多く含む。暗歛見。
	甌 I 2 A 25 茶褐色砂層	61		体部外面条底、内面ナデ。口縁部内面に梯形押引文をめぐらす。	灰茶色。砂粒を多く含む。暗歛見。
	甌 I 2 A 25 茶褐色砂層	62		体部外面条底、口縁部に斜めに加える。内面ナデ。口縁部に梯形押引文をめぐらす。	黒褐色。砂粒を多く含む。
	甌 I 2 A 25 茶褐色砂層	63		体部外面条底、内面ナデ。口縁部内面に梯形刺突文をめぐらす。	褐色。砂粒を多く含む。
	甌 I 2 A 25 茶褐色砂層	64		体部外面荒い条底、内面ナデ。口縁部内面に太目の梯形刺突文をめぐらす。	褐色。砂粒を多く含む。
土器	甌 II 1 A 11 黒褐色砂層	65		体部外面細い条底、内面ナデ。底面布底。	赤橙色。砂粒を多く含む。
	甌 II 1 B 3 黒色砂層	66		体部外面条底、内面ナデ。底面布底。	黒褐色。砂粒を含む。
	甌 II 2 A 7 灰褐色砂層	67		体部外面と口縁部内面ハケ目。頸部内面ナデ。口端に梯形刺突を加える。	橙色。砂粒を多く含む。
	甌 II 1 B 14 黒色砂層	68		体部内外面ともナデ。外面に梯形横線を加える。	黒褐色。砂粒を多く含む。
	甌 I 2 A 24 黒色砂層	69		体部内外面ともハケ目。口端にハケ原体によるとみられる刻みを加える。	橙色。砂粒を多く含む。
	甌 II 3 A 14 灰褐色砂質土	70		体部内外面ともナデ。外面に極細の横角状具による波状文をめぐらす。	黒色。砂粒を多く含む。

種 別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特 徴	備 考
器	壺 II 2 A 3 黒色砂層	71		体部内外面ともナデ。外面に櫛縞の櫛齒状具による波状文をめぐらす。	黒色。砂粒を多く含む。
	壺 II 1 B 3 黒色砂層	72		体部内外面ともナデ。外面に2条1組の横線と縱線を加え、横線間に櫛縞波状文をめぐらす。	暗灰色。砂粒を含む。
	壺 II 1 B 14 黒色砂層	73		体部内外面ともナデ。外面にヘラ描きの文様及び割みを付す。	黒褐色。砂粒を多く含む。
	壺 II 2 A 7 灰色砂層	74		体部内外面ともナデ。外面に櫛縞波文、その間に縦に断面が円形の櫛齒による押引を加える。頸部に円形刺突文がめぐる。	淡褐色。砂粒を多く含む。
	壺 II 2 A 7 灰色砂層	75		体部内面ハケ目。外面ハケ目調整の後ナデ。櫛縞波状文を加える。	淡橙色。砂粒を含む。
	壺 II 2 A 7 灰色砂層	76		口縁部が受口状をなす。体部内面及び口縁部外面ナデ。外面ハケ目。口縁部に沈線とハケ原体によるとみられる割みを加える。	淡橙色。砂粒を多く含む。
	壺 II 3 A 14 灰褐色砂質土	77		体部内面ナデ。外面ハケ目の上に横線を加える。	淡黄色。砂粒を含む。
	壺 II 3 A 14 灰褐色砂質土	78		体部内外面ハケ目。口縁部外面ナデ。口端に刺突を加える。	黒褐色。砂粒を含む。
	壺 II 1 B 14 黒色砂層	79		体部内外面ナデ。口端が垂下して口縁帯を作りだし、櫛縞波状文をめぐらす。口縁部内側に櫛齒の羽状刺突を加える。	淡褐色。砂粒を含む。
	壺 II 1 B 14 黒色砂層	80		体部内外面ともナデ。幅太の口縁帯に5条の沈線がめぐり、円形浮文を付ける。	淡黄色。
土 器	壺 II 1 B 14 黒色砂層	81		体部内外面ナデ。外面に櫛縞波状文、羽状刺突、2条の横線、刺突列がめぐる。	淡褐色。
	壺 I 2 A 25 茶褐色砂層	82		体部内外面ナデ。外面に櫛縞横線と波状文及び円形刺突列をめぐらす。	淡褐色。砂粒を含む。
	壺 II 1 B 25 黒褐色植物層	83		体部内外面ハケ目。口縁部外面にハケ原体によるとみられる斜めの押圧を加える。	褐色。
土 器	壺 II 1 B 14 黒色砂層	84		体部外面ハケ目、内面ナデ。口縁帯に羽状の刺突をめぐらす。	淡褐色。
(深鉢形土器)	I 2 A 25 茶褐色砂層	85 86 87		体部内面剥落。外面へラけずり。下記の尖底瓶丸底土器の側部。	淡橙色・黒紅色・暗褐色、橙色に変色。砂粒を多く含む。

種別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
(深鉢形土器)	I 2 A 24 黒色砂層	88		丸底。外面ナデ。内面器壁剥落。	褐色、淡橙色、灰褐色に変色。砂粒を多く含む。
	II 1 B 15 溝 5 内	89		丸底。内面丁寧なナデ。外面へラけずり。	淡褐色、砂粒を多く含む。
	II 2 A 4 黒色砂層	90		ヘラけずりの小さな平底。外面へラけずり。 内面器壁薄く剥落。	灰褐色、桃色に変色。砂粒を多く含む。
	I 2 A 25 茶色砂層	91		ヘラけずりの小さな平底。外面へラけずり。 内面ナデ。	淡橙色。砂粒を多く含む。
	I 2 A 25 茶褐色砂層	92		丸底。外面へラけずり。内面ナデ、一部薄く剥落。	外面灰橙色。内面橙色。砂粒を多く含む。
	I 2 A 25 茶褐色砂層	93		丸底。外面へラけずり。内面へラけずりとナデ。	橙色、砂粒を多く含む。
	I 2 A 4 溝 10 内	94		丸底。内外面とも器壁が薄く剥落。	淡橙色、桃色に変色。砂粒を多く含む。
	I 2 A 25 茶褐色砂層	95		外面へラけずり。内面器壁薄く剥落。	橙色。砂粒を多く含む。
	I 2 A 25 茶色砂層	96		外面へラけずり。内面へラ削りの後ナデ。	橙色。砂粒を多く含む。
	I 4A16-21 灰色砂層	97		外面へラけずり。内面器壁薄く剥落。	白色、淡黄色、桃色に変色。砂粒を多く含む。
弥生土器	I 4A16-21 灰色砂層	98		尖底。外面へラけずりとナデ。内面ナデ。	白黄色。砂粒を多く含む。
	I 4A16-21 灰色砂層	99		尖底。外面器壁剥落。内面ナデ。	淡黄色、淡紅色、淡橙色に変色。砂粒を多く含む。
	I 4A16-21 灰色砂層	100		丸底。外面へラけずり。内面ナデ。	橙色。砂粒を多く含む。
	壺 II 1 A 18 黒色砂層	101	口径 9.8	口頭部外面横横縫線。口縫部に先の鋭いへラ状具による刺突文をめぐらす。	淡褐色。砂粒を多く含む。
	壺 II 1 A 7 黒色砂層	102	口径 10.0	体部外面ハケ目。口縫部横横縫線。	橙色。
瓶	II 3 A 14 黒色砂層	103	底径 6.5	体部外面細かいハケ目。焼成後、底部に孔を一つあける。	淡橙色。砂粒を多く含む。

種 別	出土区 ・層位	回版 番号	法量 (cm)	特 微	備 考
甕	II 1 B 20 灰色砂層上面	104	底径 5.5	底面に孔をあけるが、貫通せず。	黒褐色。砂粒を多く含む。
	I 2 A 25 茶褐色砂層	105	口径 10.5	体部外面横描縱線。口辺部内面ナデ。	灰茶色。
	II 1 B 25 灰茶色植物層	106		体部外面ハケ目。頭部に凸帯をめぐらし、 都歯刺突を施す。胸部横描波状文をめぐらす。	黒褐色。
甌	I 2 A 7 灰色砂層	107	口径 11.8	体部外面細かいハケ目。口縁部に押引文、 頭部に4条の沈線をめぐらす。	淡橙色。砂粒を多く含む。
	I 2 A 25 茶褐色砂層	108	胴部径 24.6	胴部の最も張り出したところはヘラみがき でその下方はハケ目。内面はヘラけずり。	淡黄色。
	II 1 A 13 ピット内	109	底径 14.4	脚部外周ヘラみがき、脚端に3条の沈線を めぐらす。	黒褐色。
生	把手	II 1 B 14 黑色砂層	110		把手付鉢の把手部と考えられる。
	舌付甌	II 1 B 14 黑色砂層	111	底径 6.7	体部表面が摩耗し調整不明。
	甕	II 1 A 7 黒褐色砂層	112	口径 18.0	頭部ハケ目。胴部内外面へラけずり。口縁 部内外面ナデ。
土	鉢	II 1 B 14 黑色砂層	113	口径 14.6	口縁部が受口状をなす。体部外周ナデ。口 縁部と胴部にヘラ状具による刺突文をめぐらす。頭部下方細かいハケ。
	甕	II 1 A 7 黒褐色砂層	114	口径 16.8	体部外面ナデ。内部は口縁部がハケ目、胴 部がヘラけずり。
	甌	II 1 B 14 黑色砂層	115	口径 15.6	口縁帶に浅い沈線が2条めぐり、舟を走る 内面は細かいヘラみがき。
器	甌	II 1 B 14 黑色砂層	116	口径 19.4	口縁帶に棒状浮文2個1組を4箇所つける。 口縁帶横ヘラみがき。体部内外面纏ヘラみ がき。
	甌	II 1 B 9 黑色砂層	117	口径 14.2	体部内外面とも纏の細かいヘラみがき。
	甌	II 1 B 14 黑色砂層	118	口径 21.8	口縁帶と内面下半丹吹り。口縁帶に3個1 組の棒状浮文をつける。内面に棱をもち、 その上半に羽状刺突文をめぐらす。丹吹り の部分ヘラみがき、他はなで。

種別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
弦生上器	壺 II 1 B 9 黒色砂層	119	口径 14.6	体部内外面ナデ。	褐色。砂・礫を含む。
	壺 II 2 A 7 灰色砂層	120	胴径 9.0	腹部はわずかに扁球形で、上げ底に作りだす。体部内外面ともナデ。	淡褐色。口縁部欠損。
	壺 II 1 A 12 黒色砂層	121		体部内外面ともナデ。小円が8個連なる施文具による刺突文と、その間に横描波状文をめぐらす。頭部に浅い沈線がめぐる。	淡褐色。礫を含む。
	甕 II 1 B 15 溝 5 内	122	口径 19.4	体部外面ハケ目。内面ナデ、ハケ目、ヘラけずり。口端に刺突文をめぐらす。	淡褐色。砂・礫を多く含む。
	甕 II 1 B 14 黒色砂層	123	口径 19.2	口縁部が受口状をなす。口縁に横齒の刺突文をめぐらす。口縁部内外面ナデ。頭部、胴部ハケ目。	黄土色。砂・礫を多く含む。
	甕 II 1 B 3 黒色砂層	124	口径 18.6	体部内外面ともナデ。外面にハケ目、内面にヘラのあとが残る。	灰橙色。砂・礫を多く含む。
	甕 II 1 B 14 黒色砂層	125	口径 13.2	口縁部内外面ともナデ。胴部は外面ハケ目。	灰色。
	甕 II 1 B 14 黒色砂層	126	口径 18.2	口縁部が受口状をなす。口縁部に横齒の刺突文をめぐらす。体部内外面ともナデ。頭部内面ハケ目。	灰黄色。砂・礫を多く含む。
	甕 II 1 B 14 黒色砂層	127	口径 14.3	体部内外面ともナデ。胴部外面にわずかにハケ目が残る。	褐色。砂粒を多く含む。
	甕 II 1 A 17 黒色砂層	128	底径 7.9	甕の脚。体部外面ハケ目、内面ナデ、内底面へラけずり、ナデ。	淡褐色。砂粒を多く含む。
土師器	甕 II 1 B 14 黒色砂層	129	底径 8.5	甕の脚。体部外面ハケ目。内面へラけずり。	淡褐色。砂粒を多く含む。
	甕 II 1 B 14 黒色砂層	130	底径 8.3	甕の脚。体部内外面ともナデ。外面にわずかにハケ見が残る。	灰褐色。砂粒を多く含む。
	壺 II 1 A 6 茶褐色砂層	131	口径 14.8	口縁が横にひろがり、口縁帯を作る。内外面とも丹塗り。胴部外向に横描横線と、6個1組の刺突文をめぐらす。	淡橙色。
	壺 I 2 A 25 茶褐色砂層	132	口径 13.0	口縁部を折り返して作りだす。体部内外面ともハケ目、ナデ。	淡褐色。
壺	I 2 A 25 茶色砂層	133	口径 10.5	体部内外面ともナデ。	淡橙色。

種 別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特 徴	備 考
土 器	高杯 II 1 B 14 黒色砂層	134		円形の透し孔が3箇所ある。体部外面へラ みがき。	淡褐色。
	高杯 II 1 B 14 黒色砂層	135	口径 24.2	体部内外面ともへラみがき。	黒褐色。疊を含 む。
	高杯 II 1 B 3 黒色砂層	136	口径 20.2	浅い皿状の杯部。外面の周辺部に円形でそ の中には円形の刺穴を施す浮文をめぐらす。 体部内外面ともへラみがき。	淡橙色。
	高杯 II 1 B 14 黒色砂層	137	底径 13.0	円形の透し孔が3箇所ある。体部外面へラ みがき。内面へラけずり、ナデ。	黄白色。
	高杯 II 1 B 15 黒色砂層	138	底径 11.2	円形の透し孔が3箇所ある。体部外面ナデ。 内面へラけずり、ハケ目。	淡褐色。砂粒を 含む。
	器台 II 1 B 15 黒色砂層	139		円形の透し孔が3箇所ある。体部内外面と もナデ。	淡黄色。砂粒を 含む。
	器台 II 1 B 14 黒色砂層	140	底径 6.8	円形の透し孔が3箇所ある。体部外面と内 底面へラみがき。脚内面へラけずり。	淡黄色。
	甕 II 1 B 15 黒色砂層	141	底径 7.4	甕の脚。体部外面ナデ。内面指によるけず り。	褐色。砂粒を多 く含む。
	甕 II 1 B 15 黒色砂層	142	口径 17.0	口縁部内外面ナデ。胴部外面ハケ目、内面 ナデ。	淡褐色。砂・礫 を多く含む。
	壺 II 1 B 9 黒色砂層	143	口径 16.8	口縁内面へラみがき。体部外面ナデ。	淡褐色。
器	甕 II 1 A 7 茶褐色砂層	144	口径 17.7	口縁内面細かいハケ目。頸部外面ハケ目。	淡褐色。砂粒を 多く含む。
	壺 II 2 A 7 黒色砂層	145	胴径 15.8	体部外面摩耗。内面へラけずり、ナデ。	橙色。口縁部欠 損。砂粒を含む。
	高杯 II 1 B 15 黒色砂層	146	口径 14.6 底径 11.0	杯部内外面ともナデ。脚部外面へラけずり のちナデ、内面ナデ。	茶色。砂粒を多 く含む。
	壺 II 1 B 15 黒色砂層	147	胴径 11.0	底部へラけずり。内面へラけずり、ナデ。	淡灰黄色。砂粒 を多く含む。口 縁部欠損。
	高杯 II 1 B 15 黒色砂層	148	底径 11.6	体部外面ナデ。内面へラけずり。	黒褐色。砂粒を 含む。
甕	甕 II 1 B 20 黒色砂層	149	口径 11.8	S字状口縁。口縁部内外面ナデ。胴部外面 ハケ目。	褐色。細砂粒を 含む。

種別	出土区・層位	団版番号	法量(cm)	特徴	備考
甕	II 1 B 15 黒色砂層	150	口径 11.2	口縁部内外面ナデ。胸部外面荒いハケ目、内面へラけずり。	褐色。砂粒を含む。
	I 1 A 21 茶褐色砂層	151	口径 14.4 底径 7.6 高 (20.3)	口縁部内外面ナデ。胸部外面は底面までハケ目。焼成後、胸部に孔をあける。	灰褐色。細砂粒を多く含む。
土器	甕 I 2 A 25 ピット内	152	口径 18.1 底径 9.2	体部内外面ともナデ。ハケ目のあとがわずかに残る。	口縁部と底部が同じビット内から出土しており同一個体とみられる。淡黄色。砂粒を多く含む。
鉢	I 1 A 21 茶褐色砂層	153	口径 20.5 底径 6.8 高 (30.0)	口縁部内外面ナデ。胸部外面は底面までハケ目。内面はナデ。	淡灰褐色。砂粒を多く含む。
	I 2 A 25 茶褐色砂層	154		体部内外面ともナデ。口縁部に羽状刺突を加える。口縁部内側に線刻画。	淡褐色。砂粒を含む。
器	甕 I 2 A 15 ピット内	155		体部外向ハケ目。内面ナデ。外面に線刻画。	灰色。次のものと同一個体とみられるが出土したビットは異なる。
	甕 I 2 A 15 ピット内	156		体部外向ハケ目。内面ナデ。外面に線刻画。	灰色。
(不明)	II 1 B 15 黒色砂層	157		体部内外面ナデ。外面にヘラ状具による線刻画風文様を描く。	淡褐色。砂粒を含む。細片にて器種不明(手縫形土器か)。
須恵器	杯蓋 II 1 B 20 黒色砂層	158		天井部の約8まで回転へラけずり。中央に四んだつまみを付す。	灰色。砂粒を含む。
	杯蓋 II 1 B 3 黒色砂層	159	口径(12.8)	天井部が低く、最も近くまで回転へラけずり。口縫部は直立し、端部が段をなす。	灰色。
須恵器	杯蓋 II 1 B 14 黒色砂層	160	口径(12.4)	天井部回転へラけずり。口縁部はわずかに外反し、端部は段をなす。	淡灰色。
	杯蓋 II 1 A 7 茶褐色砂層	161	口径(13.4)	口縁部は直下に下がり、端部が内傾する。	暗灰色。
須恵器	杯蓋 II 1 B 25 黒色植物層	162	口径(15.4) 高 5.0	天井部回転へラけずり。口縁端部が内傾する。	灰白色。砂粒を含む。
	杯蓋 II 2 A 7 灰色砂層	163	口径(14.5)	天井部回転へラけずり。口縁端部が内傾する。	灰色。

種別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
須	杯蓋 II 1 B 14 黒色砂層	164	口径(13.8) 高 ( 5.2 )	天井部回転ヘラけずり。断面が三角形をなす稜を作り出し、口縁部は直下に下がり、口端が内傾する。	暗灰色。
	杯蓋 I 2 A 15 茶褐色砂層	165	口径(14.0)	天井部と口縁部を界する稜の断面が三角形をなす。口縁端部はわずかに内傾する。	灰色。
	杯蓋 II 1 B 4 黒色砂層	166	口径 12.5 高 4.5	天井部の約1/2まで回転ヘラけずり。口縁端部は丸く、内面でわずかに段をなす。	灰色。天井部に直線のヘラ記号を刻む。
	杯蓋 II 2 A 7 灰色砂層	167	口径(10.9) 高 3.8	天井部の約1/2まで回転ヘラけずり。口縁端部は丸く、内面でわずかに段をなす。	灰色。
	杯身 II 1 B 15 黒色砂層	168	口径(12.8) 高 4.9 受部径(14.5)	口縁部はわずかに内傾し、端部は山形をなす。受部は横にのび、その直下で回転ヘラけずりを施す。底部は平らに近い。	灰色。
	杯身 I 2 A 25 茶色砂層	169	口径(11.8) 高 4.2 受部径(13.4)	口縁部はほぼ直立し、受部が横にのびる。底面は平らに近く約1/2まで回転ヘラけずりを施す。	暗灰色。
志	杯身 II 1 B 15 黒色砂層	170	口径(12.3) 高 ( 4.4 ) 受部径(14.1)	口縁部はわずかに内傾し、端部内面がわずかに段をなす。受部は上方にのび端部は丸味をおびる。底面は平らに近く約1/2まで回転ヘラけずりを施す。	灰色。
	杯身 II 1 B 15 黒色砂層	171	口径(13.6) 高 5.8 受部径(15.6)	口縁端部が内傾し段をなす。受部は丸味をおびる。底面の約1/2まで回転ヘラけずりを施す。	淡灰色。外底面に格子状のヘラ記号を刻む。
	杯身 II 2 A 2 黒色砂層	172	口径(13.0) 高 6.3 受部径 15.4	口縁端部が内傾し段をなす。受部は横に長くのびる。底部は受部下に浅い沈線をもち、約1/2まで回転ヘラけずりを施す。	灰色。
	杯身 II 1 B 14 黒色砂層	173	口径(13.0) 高 4.9 受部径(14.7)	口縁端部が内傾し段をなす。受部の下が垂下し、稜を作る。底部は約1/2まで回転ヘラけずりを施す。	灰白色。砂粒を含む。
器	杯身 II 1 B 15 黒色砂層	174	口径 13.7 高 5.7 受部径 15.4	口縁端部がわずかに凹面をして内傾する。受部下に沈線をめぐらす。底面は約1/2まで回転ヘラけずり。	灰色。
	杯身 II 1 C 9 黒色植物層	175	口径 12.4 高 5.0 受部径 14.3	口縁端部がわずかに凹面をして内傾する。底面は約1/2まで回転ヘラけずりを施す。	黒灰色。砂・根を含む。
	杯身 II 1 B 20 黒色砂層	176	口径(13.4) 受部径(15.4)	口縁端部が内傾し、稜をなす。	灰色。
	杯身 II 1 B 14 黒色砂層	177	口径(12.5) 受部径(14.7)	口縁端部が内傾し稜をなす。受部下に沈線をめぐらす。底面は約1/2まで回転ヘラけずりを施す。	青灰色。砂粒を多く含む。

種 別	出土区 ・層位	國 號 番 号	法量 (cm)	特 徴	備 考
須	杯身 II 1 C 10 黒色植物層	178	口径(13.0) 高 5.7 受部径(15.4)	口縁部内側にわずかに稜を作る。受部は丸味をもつ。底面は約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	青灰色。
	杯身 II 1 C 9 黒色植物層	179	口径(13.8) 受部径(16.4)	口縁部内側にわずかに稜を作る。受部は丸味をもつ。底面は約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	灰色。細砂粒を含む。
	杯身 II 1 B 3 黒色砂層	180	口径 10.8 高 5.3 受部径 13.5	口縁部が内傾し、端部は丸い。受部は丸味をもち、下方に細い沈線をめぐらす。底面は約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	灰茶色。細砂粒を含む。
	杯身 II 1 B 15 黒色砂層	181	口径(13.5) 受部径(15.7)	口縁部が内傾し、端部は丸い。受部は丸味をもつ。底面は約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	淡灰色。
	杯身 II 2 A 7 灰色砂層	182	口径(12.0) 高 4.5 受部径(13.8)	口縁部が内傾し、内側上方に沈線をめぐらす。受部は丸味をもつ。底面は約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	淡灰色。
	杯身 II 1 C 9 黒色植物層	183	口径(12.4) 高 5.3 受部径(14.6)	口縁部が内傾し、端部はわずかに凹面をなして内傾する。底面は約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	灰色。砂粒を多く含む。
	杯身 II 1 A 22 黒色砂層	184	口径 10.7 高 4.6 受部径 13.0	口縁部が内傾し、端部は丸い。受部は丸味をもつ。底面は約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	淡灰色。砂粒を含み疊散見。
惠	杯身 II 3 A 14 灰色砂層	185	口径(11.2) 高 4.0 受部径(12.8)	口縁部はわずかに崩折してのび、端部は丸い。受部は小さく、底面の約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	灰色。外底面に三叉様のヘラ記号を刻む。
	杯身 II 1 B 15 黒色砂層	186	口径 10.8 高 4.1 受部径 12.6	口縁部が内傾し、端部は丸い。受部は小さく、底面の約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	淡灰色。
	杯身 II 1 B 20 黒色植物層	187	口径( 9.8) 高 3.5 受部径(11.7)	口縁部がカーブして立ち上がり、端部は丸い。底面は約1/6まで回転ヘラけずりを施す。	灰色。砂粒を含む。外底面に薄緑色の自然釉がかかる。
	杯蓋 II 1 A 1 茶褐色砂層	188	口径 15.0 高 3.7	天井部にややふくらみをもち口縁に至り、約1/6まで回転ヘラけずりを施す。中央に擬宝珠形のつまみを付す。	灰色。
	杯蓋 II 1 B 25 黒色植物層	189	口径 14.0 高 3.1	扁平な擬宝珠形のつまみを付す。口縁部の折り曲げの幅が広い。	灰褐色。砂粒を多く含む。
器	杯蓋 II 1 B 25 黒色植物層	190	口径(14.4) 高 3.4	天井部にわずかにふくらみをもち口縁に至る。口浦は崩折する。擬宝珠形のつまみを付す。	灰褐色。内面に直線のヘラ記号を刻む。

種別	出土区・層位	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
須	杯身 II 3 A 15 灰色砂層	191	口径 12.5 高 4.2	体部が丸味をもって立ち上がる。底面は回転系切りの後、手持ちヘラけずりを施す。	青灰色。砂粒を含む。
	杯身 II 3 A 14 灰色砂層	192	口径(13.2) 高 4.5	底面に手持ちヘラけずりを施す。	灰黄色。
	鋤 II 1 B 25 黒色植物層	193	口径 12.5 高 5.2 底径 6.2	側部が丸味をもって立ち上がり、口端は丸い。外底面へラ痕が残る。	灰色。砂粒を含む。
	杯身 II 1 B 25 黒色植物層	194	口径 12.5 高 3.6 底径 7.4	体部は底面から横にのび直線的に立ち上がる。底面はヘラ切り。	灰褐色。砂粒を多く含む。
	杯身 II 1 B 15 黒色砂層	195	口径(12.1) 高 3.1 底径 6.9	体部は底面から横にのび直線的に立ち上がる。体部の腰部から底面まで回転ヘラけずりを施す。	灰色。外底面に示偏か「木」と読める墨書きがある。
	杯身 II 1 B 25 黒色植物層	196	口径 13.2 高 4.5 底径 7.0	体部は底面から斜めにのび屈曲して直線的に立ち上がる。屈曲する部分から底面まで回転ヘラけずりを施す。	褐色。外底面に「木」と読める墨書きがある。
	杯身 II 1 B 25 黒色植物層	197	口径(12.0) 高 3.5 底径 7.0	体部は底面から横にのび直線的に立ち上がる。底面に回転ヘラけずりを施す。	暗灰色。
	杯身 II 1 B 25 黒色植物層	198	口径(11.8) 高 4.7 底径( 5.5)	体部は底面から斜めにのび屈曲して直線的に立ち上がる。体部の屈曲部より下に回転ヘラけずりを施す。	暗灰色。砂粒を多く含む。
恵	杯身 II 1 B 25 黒色植物層	199	口径 8.8 高 3.7 底径 5.1	口径の小さなもので、体部の屈曲部より下方に回転ヘラけずりを施す。	灰色。
	杯身 II 1 B 25 黒色植物層	200	口径(15.0) 高 5.7 高台径 10.3	深みのあるもので、高台は外側に張り出し、端部は画をなす。外底面は系切りの後、回転ヘラけずりを施す。	灰色。
	杯身 II 3 A 14 灰色砂層	201	口径(14.4) 高 3.2 高台径 10.1	浅いもので、高台の断面が四角形をなす。外底面は回転ヘラけずりを施す。	青灰色。
	杯身 II 1 B 25 黒色砂層	202	口径(16.6) 高 4.7 高台径 12.2	浅いもので、高台は外側に張り出す。外底面は回転ヘラけずりを施す。	暗灰色。
器	杯身 II 1 B 25 黒色砂層	203	口径(19.2) 高 4.3 高台径(13.6)	浅くて口径の大きいもので、断面四角形の高台を付す。外底面は回転ヘラけずりを施す。	灰色。砂粒を多く含む。
	杯身 II 1 B 25 黒色砂層	204	口径(12.2) 高 3.4 底径( 7.0)	回転系切りの底部からほほ直線的に斜め上方にのびる体部。	暗灰色。砂粒を多く含む。

種別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
瓶	杯身 II 1 B 25 黒色砂層	205	口径 10.9 高 3.6 底径 6.3	回転糸切り底。	灰色。外底面に「ヰ」字様のヘラ記号を刻む。
	杯身 II 1 B 25 黒色植物層	206	口径 12.3 高 4.0 底径 6.7	回転糸切り底。	灰色。内外面に煤状のもの付着。
	杯身 II 1 B 25 黒色植物層	207	口径(12.4) 高 3.5 底径 6.6	回転糸切り底。	灰褐色。砂粒を多く含む。
短瓶壺	II 1 B 14 黒色植物層	208	口径 7.1 高 6.7 側部径 11.2	口縁部はほぼまっすぐで、腹部はわずかに凹面をなし段を作る。肩部は肩が張り、底面は手持ちヘラけずりを施す。	青灰色。
盤	II 1 A 6 溝 6 内	209	高台径 (9.8)	高台下端が外側へ張り出す。外底面は回転ヘラけずりを施す。	灰色。
(甌)	II 1 B 15 黒色砂層	210	側部径(11.0)	球形の胴部中央に凸線をめぐらし、その上に波状文を加える。底面は手持ちヘラけずりを施す。	灰色。外底面に×印のヘラ記号を刻む。
甌	II 1 B 14 黒色砂層	211	側部径 11.1 底径 8.3	球形の胴部上半に 2 条の沈線と斜めの刺突文をめぐらす。下半は回転ヘラけずりを施す。	灰色。砂粒を含む。外底面にヘラ記号を刻む。
	II 1 B 9 黒色砂質土	212	側部径 8.7 底内径 1.1	胴部中央に 2 条の沈線をめぐらし、その間に彌齒の刺突を斜めに加える。外底面は回転ヘラけずりを施す。	灰色。砂粒を含む。
甌	II 1 B 14 黒色植物層	213	側部径 7.7 底内径 1.0	肩の張った胴部の中程に 2 条の沈線をめぐらし、その間に彌齒の押引文を加える。下半は回転ヘラけずりを施す。	灰色。
高杯	I 2 A 20 茶色砂層	214	底径 8.8	外側に大きく聞く脚で、端部を幅広く作る。	青灰色。砂粒を含む。
高杯	II 1 B 14 黒色砂層	215	底径 9.4	外側に大きく聞く脚で、端部を幅広く作る。	青灰色。砂粒を多く含む。
器	II 1 B 15 黒色植物層	216	口径 9.9 高 8.7 底径 8.5	杯部は丸味をおびて立ち上がり、端部は丸い。脚は外側に大きく聞く。	暗灰色。砂粒を多く含む。
	II 1 A 12 黒褐色砂層	217	口径(20.2)	杯部は大きく外側に開き、中央に凸線を作り出し、その下に 2 条の沈線をめぐらし、沈線間に浅い斜めの押引文を加える。下底面は回転ヘラ削りを施す。	青灰色。砂粒を多く含む。
	II 1 B 14 黒色砂層	218	口径(18.4)	口縁部上方に 2 段のふくらみを作り出す。胴部は叩きを施す。体部内面ナデ。	灰色。

種 別	出土区 ・層位	図版 番号	法 軸 (cm)	特 徴	備 考
頃	甕 II 1 B 14 黒色砂層	219	口径(16.6)	口縁部上方に1段のふくらみを作り出す。胴部は叩きを施し、1条の沈線がめぐる。体部内面ナデ。	黒色。
	甕 II 1 B 20 黒色砂層	220		口縁部外側に波状文をめぐらし、端部は凹面を作り出す。内面ナデ。	青灰色。
	甕 I 1 A 16 黒褐色砂層	221		口縁部に凸線を作り出し、波状文をめぐらす。内面ナデ。	青灰色。砂粒を含む。
	甕 II 1 A 2 黒色砂層	222		口縁部に凸線を作り出す。内外面ともナデ。	灰色。
	甕 II 1 B 20 黒色砂層	223		口縁部に凸線を作り出し、波状文をめぐらす。内面ナデ。	青灰色。砂粒を含む。
	甕 II 2 A 4 溝 10 内	224		頭部近くに断面三角形の凸線を2条めぐらし、波状文を加える。	黒灰色。
	甕 I 1 A 16 茶色砂層	225		頭部近くに凸線をめぐらし、波状文を加える。	暗灰色。
	甕 I 2 A 20 茶色砂層	226		体部に叩きを施し、下方はナデを加える。沈線がめぐる。内面スリケン。	灰色。
	甕 II 1 B 9 黒色砂層	227		体部外面叩き。内面スリケン。	淡褐色。砂粒を含む。
	高杯 II 1 A 7 黒色砂層	228		脚部で、長方形をなすとみられる透し孔が2段とその間に凸線を2条めぐらし、透し孔を入れる部分に波状文を加える。	灰色。暗緑色の自然種がかかる。
器	瓶 II 1 B 14 黒色砂層	229		口縁部に凸線を作り出し、叩きを施す。内面ナデ。	灰色。
	瓶 I 2 A 25 茶褐色砂層	230		体部外面に叩きを施し、口縁部に凸線を作り出す。口端は尖がる。	灰色。
	瓶 I 2 A 25 茶褐色砂層	231		体部外面に叩きを施し、口縁部を外側へ折り曲げる。	灰色。
	瓶 I 2 A 25 茶褐色砂層	232		体部外面に叩きを施す。口縁部に凸線を作り出し、口端は外傾する。	灰色。
	瓶 I 2 A 24 黒色砂層	233		体部外面に叩きを施す。口縁部を外側へ折り曲げ、外面に凸線をめぐらす。把手付。	灰白色。砂粒を含む。
	瓶 II 2 A 7 灰色砂層	234		体部外面に叩きを施す。口縁部を外側へ折り曲げ、外面に凸線をめぐらす。	淡黄色。

種別	出土区 ・層位	団版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
瓶	II 3 A 14 灰色砂層	235		体部外面に叩きを施す。口端は平坦である。	暗灰色。
	II 1 B 15 黒色砂層	236		体部外面に叩きを施す。口縁部に沈線を2条めぐらす。	灰色。
	I 4 A 13 用 水 内	237		体部外向ハケ目。内面ナデ。	灰橙色。砂粒を含む。用水内で採集。
甕	II 3 A 14 灰色砂層	238		体部外向横ハケ目に縱ハケ目を加える。内面ナデ。円孔をあける。	淡橙色。砂粒を含む。用水内で採集。
	I 4 A 13 用 水 内	239		体部外向へラけずり、ハケ目。内面ナデ。	灰橙色。砂粒を含む。用水内で採集。
	I 4 A 13 用 水 内	240		体部外向ハケ目。内面ナデ。外面に凸唇をはり付け、その上を引っかいて凹面を作り出す。円孔をあける。	橙色。用水内で採集。
灰 甕	II 3 A 14 灰色砂層	241	口径(15.2) 高 5.1 高台径 7.9	底面から体部の約1/3まで回転へラけずりを施す。断面が四角形をなす高台を付ける。 無輪。	灰色。砂粒を多く含む。
	II 3 A 14 黒褐色砂層	242	口径(16.2) 高 4.0 高台径 8.9	浅いもので口端は丸くおさまる。底面から体部の約1/3まで回転へラけずりを施す。高台はわずかに外側へ張り出す。無輪。	灰白色。
	II 1 B 20 黒色	243	口径 15.3 高 6.4 高台径 7.6	体部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部に外側へ張り出す端部の丸い高台が付く。糸切り底。灰釉は濁け掛けで、ほとんど発色せず。	灰白色。下駄のところで出土。
陶 甕	II 1 B 20 黒色砂質土層	244	口径 13.0 高 4.3 高台径 6.8	体部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。高台は低く体部の底部際に付く。糸切り底。灰釉は濁け掛けで、ほとんど発色せず。	灰白色。砂粒散見。下駄のところで出土。
	II 1 B 20 黒色砂質土層	245	口径 10.2 高 3.9 高台径 5.8	体部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。高台を体部の底部際に付ける。底部外面は糸切りを指でナデて消している。灰釉は濁け掛けでほとんど発色せず。	灰白色。砂粒散見。下駄のところで出土。
	I 1 A 6 溝 6 内	246		外底面ナデ。高い高台が付く。	灰白色。
器 甕	I 1 A 2 溝 6 内	247	口径 13.4 高 4.3 高台径 6.6	体部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部がわずかに外反する難部の丸い高台が付く。糸切り底。灰釉を濁け掛けする。	灰白色。

種別	出土区・層位	団版番号	法量(cm)	特徴	備考
灰 釉 陶	楕 II 1 A 2 溝 6 内	248	高台径 7.0	端部の丸い高台を付ける。糸切り底。施釉。	灰白色。
	楕 II 1 A 7 溝 6 内	249	口徑(15.8)	体部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。無釉。	灰色。器表面に鉄分を含む砂粒ブロックが付着する。
	楕 II 1 A 2 溝 6 内	250	高台径 6.9	断面が三角形の高台を付ける。糸切り底。灰釉濁け掛け。	灰色。
	楕 II 1 A 6 溝 6 内	251	高台径 (7.8)	外側に張り出す端部の丸い高台を付ける。外底面回転ヘラけずり。無釉。	灰白色。
	楕 II 1 B 15 黒色植物層 上面	252	口徑 17.2 高 5.5 高台径 8.6	体部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部を横にのばす。高台は三ヶ月形様のものと付す。外底面ナデ。薄緑色の釉が内底面の見込みを除く部分と外面の一部にかかる。	灰色。見込みと外底面にX印のヘラ記号を刻む。
	楕 II 3 A 14 黒色砂層	253	高台径 6.5	高台は三ヶ月形をなす。外底面回転ヘラけずり。見込みに圓線を付す。灰釉濁け掛け。	灰白色。砂粒を多く含む。
85	注口付瓶 II 1 B 20 黒色砂質土層	254	口徑 6.5 高 14.4 脚部径 12.2 底径 7.9	口縁部の1箇所を押えて注口を作り出す。胴部下半及び底面に回転ヘラけずりを施す。胴部下端と底面外周にえぐりを入れて高台状の突起を作り出す。施釉。	灰色。砂粒散見。はほとんど剥落。
	段皿 II 1 B 20 黒色植物層 上面	255	口徑 13.2 高 2.4 高台径 6.8	糸切り底。灰釉を濁け掛けする。	薄茶色。砂粒散見。
	段皿 II 1 B 15 黒色砂質土層	256	口徑(13.7) 高 2.4 高台径 6.7	口縁部がゆるく外側へ張り出す。高台は断面四角形の小さなものが付く。糸切り底。無釉。	灰白色。
	皿 II 1 B 15 黒色砂質土層	257	口徑(13.5) 高 2.5 高台径 6.6	断面が三角形の高台が付く。糸切り底。灰釉を濁け掛けするが発色せず。	淡褐色。
綠釉陶器	段皿 II 1 B 15 黒色砂質土層	258	口徑(15.2)	体部内外面に綠釉を施す。	素地灰色。
染器系中世陶器	小皿 II 1 A 23 黒色砂質土層	259	口徑(10.7) 高 ( 2.9 ) 高台径 4.8	体部はわずかに丸味をおびて立ち上がり、口縁は丸い。断面三角形の高台が付く。外底面糸切りの後ナデ。高台端部にもみがらの圧痕がわずかに残る。	灰白色。砂粒を多く含む。焼きひずむ。
	小皿 II 1 C 10 黒色植物層 上面	260	口徑 9.7 高 3.5 高台径 5.1	体部は丸味をおびて立ち上がり楕形をなす。断面三角形の高台を付ける。外底面糸切りの後ナデ。	灰白色。砂粒を多く含む。

種別	出土区・層位	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
漆器系 中世陶器	耳皿 II 1 B 9 黒色砂質土層	261	口径(9.0) 高 3.7 高台径(4.4)	体部は斜め横にのび、口縁部外間にわずかにふくらみをもつ。内面全体に自然釉と不純物が付着する。断面三角形の高台を付す。	灰白色。砂粒を多く含む。
	耳皿 II 1 C 5 黒色砂質土層	262	口径(9.2) 高 4.5 高台径 4.4	相対する二側面を押さえる。端部の丸い高台を付ける。	灰茶色。砂粒を多く含む。
	山茶梅 II 1 A 23 黒色砂質土	263	口径 12.9 高 5.3 高台径 5.7	体部は直線的に外側に開き、口縁を面取りする。高台は低く雑な付け方で、下端にもみがらの疣痕が付着する。	灰白色。埋歎見。長石粒の噴き出しがみられる。
	小皿 II 1 A 11 黒褐色砂上層	264	口径 8.8 高 2.1 底径 5.0	体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁を面取りする。糸切り底。	灰白色。砂粒を多く含む。
土 鍤	II 1 B 20 黒色砂層	265	長 6.4 胴径 4.0 孔径 1.0 重(94.5g)	管状の大型のもの。棒に粘土を巻きつけて成形した後、両端を平らに押さえる。体部外面よく摩耗する。土師質。	淡黄色。一部欠損。
	II 1 C 3 黒色土層	266	長 6.8 胴径 2.5 孔径 0.6 重 44.1g	管状のもの。体部外面よく摩耗する。土師質。	褐色。砂粒を多く含む。
	II 1 B 14 黒色砂層	267	長 4.8 胴径 2.5 孔径 1.1	管状のもの。孔径が大きい。体部外面よく摩耗する。土師質。	褐色。砂粒を多く含む。一部欠損。
	II 3 A 14 灰色砂層	268	長 3.6 胴径 2.6 孔径 0.8 重(23.3g)	管状のもの。体部外面よく摩耗する。土師質。	褐色。淡黄色。砂粒を多く含む。一部欠損。
	II 1 B 14 黒色砂層	269	長(6.0) 胴径 1.8 孔径 0.6 重(15.3g)	鉗錐形のもの。体部外面よく摩耗する。土師質。	淡黄色。砂粒を含む。一部欠損。
	II 3 A 14 黒色砂層	270	長 7.2 胴径 2.5 孔径 0.6 重(35.2g)	鉗錐形のもの。手づくねによって成形する。体部外面よく摩耗する。土師質。	灰色。砂粒を多く含む。
	II 1 B 14 黒色砂層	271	長 3.3 胴径 1.2 孔径 0.3 重 4.6g	管状のもの。体部外面よく摩耗する。土師質。	淡黄色。砂粒を多く含む。

種別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
土	II 1 C 9 黒色植物層	272	長 8.5 胸径 2.8 孔径 0.8 重 62.4 g	鋸錐形のもの。手づくねによって成形する。 須恵質。	灰色。自然釉がかかる。
	II 1 B 14 黒色砂層	273	長 5.4 胸径 3.4 孔径 1.3 重 45.0 g	鋸錐形のもの。手づくねによって成形する。 土師質。	淡褐色。砂粒を含む。
埴	II 1 B 3 黒色砂層	274	長 3.2 胸径 1.2 孔径 0.3 重 (4.7 g)	鋸錐形のもの。須恵質。	灰白色。一部欠損。
製	II 3 A 15 灰色砂層	275	厚	口端は丸く、一部内側へ押さえ込む。体部 外面ナデで掌紋が残る。内面へラけずりと ナデ。	淡黄色、褐色に 変色する。砂粒 を含む。まとま って出土してお り同一個体とみ られる。
	I 2 A 20 灰色砂	277 278	杯部と接する 部分の脚 径 277-1.7 278-1.4		
埴	II 3 A 14 黒色砂層	279	杯部と接する 部分の脚 径 1.7	体部外面ナデ。	淡橙色。砂粒を 含む。
土	II 1 B 14 黒色砂層	280	杯部と接する 部分の脚 径 1.4	体部外面ナデ。	淡橙色。
	II 3 A 14 黒色砂層	281	杯部と接する 部分の脚 径 1.8	体部外面ナデ。	淡橙色。
器	II 1 B 25 黒色砂質土層	282 283		ともに体部外面がよく摩耗する。	褐色、淡褐色に 変色する。
	II 1 C 1 灰色粘質土層	284		体部外面がよく摩耗する。	黄褐色。砂粒を 多く含む。
	II 1 A 23 黒色砂質土層	285		体部外面がよく摩耗する。	淡褐色。

種 別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特 徴	備 考
製塙土器	II 3 A 14 灰色砂層	286		体部外表面がよく摩耗する。	淡褐色。
瓦	丸瓦 II 1 B 20 灰色砂層	287	厚 1.7	凸面模印叩きとナデ。凹面模印。側面ヘラけずり。	淡灰色。
	平瓦 II 1 B 15 黒色砂質土層	288	厚 2.0	凸面模印叩き。凹面模印。	淡灰色。砂粒を含む。
土 師 質 土 器	鍋 II 1 B 25 黒色砂質土層	289		口端を内外面ともに張り出させ、平坦面を作り出す。体部内外面とも横ナデ。	黒褐色。外面に煤付着。
	釜 II 1 B 25 黒色砂質土層	290		口縁部は内湾する。体部上位に鈎を付ける。口縁部の鈎上位に孔をあける。体部内外面とも横ナデ。	黒褐色。内外面ともに煤付着。
木	梯子 II 1 C 5 黒褐色植物層	291	長 (82.3) 幅 (8.1) 厚 (2.1)	△段の間隔は44cm。 △柾目材。	破損。腐朽が著しい。
	不明 II 1 C 9 砂礫混入植物層	292	長 (23.4) 突起部の高 1.0 溝の深さ 0.8 溝の幅 1.3	△溝のある突起をもつ。 △心木取。	破損。腐朽が著しい。
	曲物 底板 II 1 B 25 黒色植物層	293	洋 (10.8) 厚 0.5	△柾目材。	半欠。一部が炭化している。
	不明 II 1 B 25 黒色植物層	294	長 (16.0) 幅 (1.7) 厚 1.4	△先端近くがすり減って、わずかに凹み、その先を両側からけずり取り断面が六角形をなす。 △柾目材。	一端欠損。
鉢	不明 II 1 B 25 黒色植物層	295	長 (31.8) 幅 1.5 厚 1.3	△先端近くを両側からけずり取って薄くし厚みは1.0cmである。 △刃物で丁寧にけずり出す。 △柾目材。	一端欠損。
	不明 II 1 B 25 黒色植物層	296	長 (29.2) 幅 1.5 厚 1.1	△中ほどが先端部にくらべやや細くなる。 △短辺方向の両側面が丸味をもつ。 △柾目材。	一端欠損。
	不明 II 1 B 25 黒色植物層	297	長 (14.6) 幅 (1.7) 厚 0.7	△先端に両側からえぐりを入れ、突起を作り出す。 △柾目材。	一端欠損。
不明 II 1 B 20 黒色砂質土層	298	長 21.8 幅 1.7 厚 0.4	△一方の先端を両側からけずり取って幅をせまくし、端を斜めに切り取る。もう一方の端は垂直。 △柾目材。		

種別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特徴	備考
不明	II 1 B 25 黒色植物層	299	長 (9.7) 幅 2.0 厚 1.7	・楕円形の孔がある。 ・長辺方向の一側面にえぐりが入り段をなす。その幅は 0.6cmで、厚みは 0.4cmである。 ・柾目材。	一端欠損。端の孔は植物の根が貫通したもの。
不明	II 1 B 25 黒色植物層	300	長 10.8 幅 1.5 厚 0.8	・刀物で丁寧にけずり出す。 ・一方の端は四方向から切り取る。もう一方の端は強度で打ちたかかれている。 ・柾目材。	
木	II 1 C 5 黒色植物層	301	長 (9.5) 幅 0.9 厚 0.5	・刀物でけずり出し、断面が扁平な六角形をなす。 ・柾目材。	両端欠損。
	II 1 C 5 黒色植物層	302	長 (18.7) 径 0.9	・刀物で全面をけずる。 ・柾目材。	両端欠損。
不明	II 1 B 25 黒色植物層	303	長 (31.0) 厚 2.9 柄の長 16.0 柄の幅 4.0	・幅の広い方の一面を周囲を高く残してえぐり取り、スコップ状をなす。えぐりの深さは 1.7cm ・柾目材。	一部欠損。
製	II 1 B 25 黒色植物層	304	長 33.6 幅 3.0 ほぞ孔の 縦 0.8 横 2.0	・一側面の両端をけずり取り、中ほどに突起を作り出す。突起の中央に長方形のはぞ孔をあける。一側面に径 0.5cmのとめ孔が残る。 ・柾目材。	部材。
不明	II 1 B 20 黒色砂質土層	305	長 45.5 幅 4.8 厚 2.3 長方形の孔 縦 1.4 横 9.5	・柾目板の両端を切り落とし、刀物で丁寧に作り出す。	部材。
品	II 1 B 20 黒色砂質土層	306	長 36.3 幅 5.7 柄の径 3.5	・打つ部分の中央がよく凹んでいる。 ・柾目材。	
下駄	II 1 B 20 黒色砂質土層	307	長 21.0 幅 10.6	・歯をけずり出した逆歯の下駄。 ・台表面に足の裏のあとが残るほどよく使用され、歯もすり減ってはほとんど残っていない。 ・指先の鼻緒をすげる位置と足の裏のあとからみて左足用。 ・柾目材。	
不明	II 1 B 15 黒色砂層	308	長 (12.0) 幅 2.3 厚 0.5	・先端近くに向側からえぐりを入れる。 ・竹製。	一部欠損。

種 別	出土区 ・層位	図版 番号	法量 (cm)	特 徴	備 考
木 製 品	不明 H 1 B 20 黒色砂質土層	309	長 16.8 幅 2.5 厚 1.1	・刃物で丁寧にけずり出す。 ・心木取。	
	不明 H 1 B 15 黒色砂層	310	長 (11.2) 幅 2.6 厚 0.8	・長辺方向の両面がわずかに凹む。 ・柾目材。	両端欠損。
	不明 H 1 B 20 黒色砂質土層	311	長 (12.7) 幅 ( 1.0) 厚 1.1	・刃物でけずり出す。 ・柾目材。	両端両側面欠損。 次のものと同一 物とみられる。
	不明 H 1 B 20 黒色砂質土層	312	長 (13.6) 幅 ( 1.1) 厚 1.1	・刃物でけずり出す。 ・柾目材。	両端両側面欠損。 上記のものと同 一物とみられる。
	不明 H 1 B 15 黒色砂質土層	313	長 ( 6.0) 幅 3.7 厚 1.0	・先端を四方から切り込みを入れ切断して いる。 ・柾目材。	一端欠損。
	不明 H 1 B 15 黒色砂質土層	314	長 8.1 幅 3.7 厚 2.2	・両端を垂直に切り取る。 ・柾目材。	
	不明 H 1 B 20 黒色砂質土層	315	長 (40.8) 幅 1.8	・断面がおおむね六角形をなす。 ・柾目材。	一端欠損。
	不明 H 1 B 14 黒色砂質土層	316	長 (20.1) 幅 2.8 厚 1.8	・先端を四方向からけずり、四角形に作り 出す。 ・柾目材。	一端欠損。
	不明 H 1 B 20 黒色砂質土層	317	長 (16.1) 幅 1.8	・刃物で切断してけずり出す。 ・柾目材。	一端欠損。
	不明 H 1 B 20 黒色砂質土層	318	長 (21.7) 径 2.8	・刃物でけずり出す。 ・心材。	両端と半分欠損。

## V まとめ

天白川左岸地域の現東海市名和町から名古屋市緑区大高町一帯には、縄文時代から中世にいたる多種多様の遺跡が数多く分布する。時代をおってそのいくつかをみてみると次のようである。本遺跡の背後にのびる丘陵縁辺に縄文晩期の小規模な斎山貝塚、氷上貝塚が形成されている。遺跡の西方約700mの丘陵上には、兜山古墳とカブト山遺跡がある。兜山古墳からは、彷彿三角縁三神三獸鏡・擬文鏡・石製品などが出土し前II期後半に編年され、当地域で最古の古墳である。カブト山遺跡は、弥生後期前半から古墳後期にわたる集落跡である。同じく、西方約400mには、後I期に編年される三ツ屋古墳群（3基）がある。また、詳細は不明だが円筒埴輪が散布する扇山古墳が南約100mの丘陵上に築かれている。さらに、東方約500mにはヤマタケルノミコト（日本武尊）とミヤズヒメ（宮酢媛）の伝承をもち、尾張氏との関係が深く「延喜式」神名帳に「火上姫子神社」とある氷上姫子神社が鎮座する。そして、海岸平野部には本遺跡をはじめ、名和町・欠下遺跡や大高町・大砂子遺跡が立地する。このうち、最初に発掘調査を実施したのが本遺跡である。

以下、上記のような歴史的環境をもつ遺跡の調査成果を簡単に整理してまとめにかえた。

なお、本遺跡は池田陸介氏の踏査の所見によれば、さらに東方の大高町砂畠・中ノ島・一色山・追風までの幅約300cmほどにわたってひろがっており、今次の調査区域はその西縁にあたっている。今回検出した坑群の広がりをみても、やはり東の方へのびている。

**遺跡の地形環境について** 丘陵縁辺に、沼沢凹地と称した浅谷状の湿地が形成されている。この低湿地の北にひろがる微高地は、旧浜堤と考えられる。おそらく、縄文海進の頂期後の海水準の低下に伴い旧浜堤（標高3m）が形成され、その後背地が幅約30mの凹地（標高約2m）となって残されたものと考えられる。この低湿地の基盤面から、縄文中期末に編年される沈線によって稜形文を描く山の神式の所産とみる深鉢形土器（1）が1個体出土している。この土器の時期比定が妥当なものとするならば、縄文中期末には遺跡が形成されていたことになる。以後、先の旧浜堤とみる微高地の陸地側縁辺（II 1 B 14・15）から縄文後期中・末葉に比定する縄文土器が數点出土する。そして、縄文晩期にいたると丘陵縁辺にカキ・ハマグリ・オキシジミ・ハイガイ・サルボウなどのある小規模な貝塚が形成される。本遺跡の微高地上面からも同時期の縄文土器が、わずかではあるが出土する。この期に続く水神平式の段階になると、遺物の出土量もほんのわずかではあるが増して、出土範囲も西はI 4 A 21（標高約2m）、北はI 2 A 9、南はII 1 B 15と、微高地全面に及んでいる。

弥生中期後半になると、微高地に建物の柱穴とみられる小穴が設けられる。この時期

になると遺物の出土量もある程度まとまりをもつようになる。おそらくこの時期に、後背低湿地が水田として利用、開発され拡充していったのであろう。この低湿地の谷地形は、ほぼ平坦面を形成する黒色植物層（図5-4層）の出土遺物からみて、弥生後期後半には谷地形が消えるまでに充填が進んだことを示している。

また、微高地北縁下にひろがる標高約1.5mの低地は、遺物の散布がほとんどみられず試掘あ・お・き（図1）の結果、摩耗した須恵器の小片が数個出土した。このうち、杯身に立ち上がりをもつものがあることからみて、おそらく、古墳後期以降水田として利用されたのであろう。この北に東西に走る大高街道より北にひろがる込高新田は近世の干拓によって農地となつたところである。「尾張徇行記」によれば、この新田は延宝8年（西暦1680年）開墾の新田であり、それ以前の鳴海から知多へ通じる知多街道は、本遺跡のII4B6～II1A25を通る道であった。

**周辺の遺跡との関連について** 本遺跡では弥生後期前半の遺物が稀薄となる。この時期にカブト山遺跡のように丘陵上にも集落が営まれはじめる。この傾向は、本市荒尾町の觀音寺遺跡や中ノ池遺跡においても認められる。弥生後期後半から古墳前期（元星敷式）にかけて、また遺物の量が増大する。おそらく、生産基盤が一段と拡充されたことを示すのであろう。弥生後期になると、海岸平地には前述の欠下遺跡や兜山古墳のある丘陵南のト・メキ遺跡などでも遺物の出土量が増大する傾向をもつ。また、天白川河口に形成された江湧（あゆちゆ）の対岸台地に、弥生前期の遠賀川式土器を出土し、貝田町式以降に定着拡大する熱田台地の高藏貝塚や弥生後期の集落跡である笠守台地の見晴台遺跡が営まれはじめる。このあゆちゆ両岸の地の古墳前期に続く農業生産を主体とした生産基盤の拡大を背景にして、前II期後半に櫛年される径45mの円墳・兜山古墳が洞の入口にあたり伊勢湾口を圧する位置に築造されたのである。

次に、古墳時代の須恵器編年のII期の遺物がまとまって出土する。5世紀末から6世紀初頭にかけて、熱田台地南端西縁に尾張氏関係の墳墓とみられる東海地方最大の前方後円墳・断大山古墳が出現する。少しおくれて、6世紀前半にこの地に小規模な三ツ屋古墳群が営まれる。この古墳群は3基と小数ではあるが、この地方では初出の群集墳である。

須恵器編年III期には、本遺跡の東約1.2kmに白鳳期の細弁蓮花文軒丸瓦などの出土する大高廐寺が、また、西約1kmに同時期の瓦を大量に出土するト・メキ遺跡があり、この地にこれら寺院を建立した豪族がいたのであろう。

以上に遺物から見た本遺跡の成り立ちを記述してきたのであるが、水田利用の具体的な過程など遺跡としての性格を示すことはできなかった。前述したごとく、この地は實に密に累代の遺跡が存在するところであり、調査成果を古代地方史研究のための原資料として、さらに検討を加えてゆきたい。

## 付編 菩薩遺跡における出土植物

高木典雄

菩薩遺跡から出土した種子及び果実類について鑑定を依頼されたので検討の結果を報告する。確認し得たのは、モモ、エゴノキ、アカマツ(毬果)、カヤツリグサ科一種であるが他に種名を確認し得なかった微小種子(II 1 B 25-3・4サンプル)の一種もあった。

モモの種子(核)

II 1 C 10-Bサンプルに5個(イ~ホ)、II 1 B 25-1サンプルに2個(ヘ・ト)であったが、それぞれの大きさを測定した結果は次の通りであった(単位cm)。

個体	長さ	幅	厚さ
イ	2.10	1.95	1.60
ロ	2.15	1.80	1.50
ハ	2.25	1.95	1.40
ニ	2.30	2.20	1.90
ホ	2.70	2.25	1.70
ヘ	2.20	1.70	1.40
ト	1.90	1.70	1.40

筆者は前に依頼を受けて朝日遺跡より出土した種子類を検定したことがあるが、その中で、モモについては約50個、そして核の大きさは、その成熟度とも関係しているが、長さでは最小1.45cmから最大3.25cm、幅は最小1.15cmから最大2.55cm、厚さは最小0.9cmから最大1.8cmであった。菩薩遺跡のものはこれと比較すると(菩薩遺跡のものは数が少く比較すること自体が無理ではあるが)その変異の範囲にはいってしまう。ただ長さと幅に比べて厚みが、いくぶん厚くなっていることや、朝日遺跡のものの中にみられるような全体が長めで、先がとがって見えるようなものは含まれていない。全体が粒ぞろいで、形がまるまった感じになっていることは指摘できそうである。現在、西日本から点々と、核の大きさが3cm以下、核の表面の凹凸が著しくなく、全体が丸みをもつて野生モモの生育が報告されているが、菩薩遺跡の出土モモは野生モモの特徴をよく示しているといえよう。ただ野生モモとされているものが、もともと日本産のものであるか、大陸からの渡来ものであるか、その起源については異論が多い。

### エゴノキ

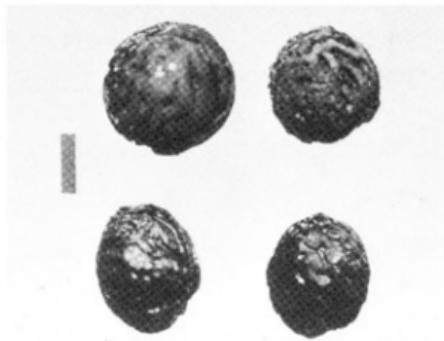
種子は II 1 B 10—B サンプルから約15個検出された。その大きさは平均の値で長さが 1.0cm、幅 0.7cm、厚さ 0.7cm、いくぶん先のとがった楕円体をなしている。エゴノキの果皮にはサボニンが含まれていて、かつてはこの果皮を叩きつぶし、その汁液を川に流し、魚を中毒させ、仮死状態になっているところを捕えるという漁法が広く行われていた。エゴノキの種子が多数集って、遺跡からよく出土するということは、その辺の事情を物語っているものと思われる。

### アカマツの毬果

ほぼ完全な毬果 3 個 (II 1 C 10—サンプル 2 個・II 1 B 25—4 サンプル 1 個)、こわれたもの 2 個 (II 1 C 10—B サンプル) あったが、鱗片の構造からみてアカマツと思われる。この中で最も大きいものは、長さが 4.2cm、直径 2.4cm、次のものは長さ 3.9cm、直径 2.4cm であった。朝日遺跡出土物の中には、いろいろの種子が発見されるが、筆者が調べた範囲では、アカマツ、クロマツの毬果はみることができなかった。菩薩遺跡のこれだけの個体数では勝手な推論はできないが、前記、エゴノキの出土と思いあわせて、現在知多半島の丘陵部に広くみられるエゴノキを混えたアカマツ、クロマツの疎林が、その頃、この土地に成立していたのではなかろうか。

### カヤツリグサ科の一種 (II 1 B 25—1・2・A・C・D サンプル)

長さ 3 mm、幅 1.5mm 程度の微小黒色粒子が多数出土する。果嚢から分離した瘦果で、下向きのとげのついた退化花弁片がみられる。もとの雄小穂も雄花顎も散逸していて種名決定ができないが、カヤツリグサ科の一種にはちがいない。かつてこの辺一帯に群落を作っていたものと想像される。



モモ  
(II 1 C サンプル B)

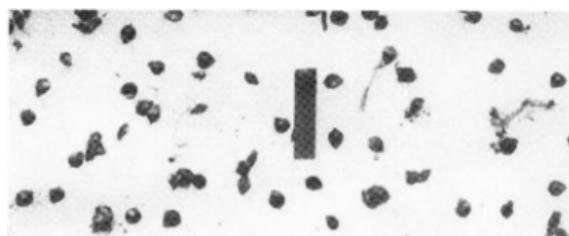
図32 種子 I (黒紙片は 1 cm を示す)



エゴノキ  
(II 1 C 10—サンプルB)



アカマツ  
(II 1 C 10—サンプルB)



カヤツリグサの一種  
(II 1 B 25—サンプル1)

図33 種子II (黒紙片は1cmを示す)

## 菩薩遺跡

1987年3月23日 印刷発行

編集発行 愛知県東海市中央町一丁目1番地  
東海市教育委員会

印刷 制 愛知県東海市名和町汐田西61-1  
秀英社

